

『無の神学』を読む⑨ 第2部 無の神学への道

『無の神学』 第2部第1章「祈りの宗教哲学」、第2章「天路」

2003年1月19日（東京 新宿）

奥田 昌道

「ネオス」と「カイノス」 第二章 天路 「はじめに」 路にはだかる三獣 三つの岐路 第三の路 罪びとの首 キリストの十字架 信仰の本質 終末的現実 孫の翔君の姿 夫婦円満の秘訣 祈り

●「ネオス」と「カイノス」

皆さん、明けましておめでとございます。昨年11月に「新宗教改革」というのをここで、『無の神学』を読むの第8回でやりました。そのときに「ネオス」と「カイノス」というところが出てきました。「ネオス」というのは、

「新年あけましておめでとございます」

と、これが「ネオス」なんです。そう言っているうちに、段々その年は古びていって、また次の新年を迎えるというふうには、時と共に古びていく新しさ、それを「ネオス」といいます。ところが、「カイノス」という新しさというのは、時が経つても古びない変わらない、常に内側が新たであるという、永遠なるものです。

私たちの生きている世界、私たちが求めているものはこの「カイノス」なんです。女性の皆さんは流行を追って、ファッションが新しくなったりいろいろいたしますね。けれども、また時がたちますと、

「あれはもう古いわ、時代後れよ」

と言って、また新しいものを買う。結局、そういう古びいくことがわかりながら、

「今はこれが最新だ」

とあって、最新情報をつかまえて満足している。

人間の身体もそうです。段々、古びていく。けれども、主さまが私たちに下さる生命、下さっている世界、それを生きる空間——霊的空間ですけれども——これは古びない、常に新たな、永遠なんです。それを下さっている。そういう永遠なるものが、この地上の生においては、似ているところは見つからないんですけれども、その過ぎ行くものの中に過ぎ行かないものを見て、人が感動するわけです。

「これは美しい、時よ止まれ。過ぎてはならない。永遠に残したい」

と。永遠に残したいというものが押し花になったり、いろんな形でそれを留めるわけです。ミイラなんていうのもそういうものだったかも知れません。いろいろ過ぎ行くものであり



ながら、過ぎ行かないものに何とか形を留めようとする。しかし、過ぎ行くものだから、そこに儂さがある。それが私たちの生きてきた人生、今いきている人生ですけれども。日本人は非常に無常感というものを心にいだいています。ものあわれとか、儂さとか、そういうものが日本人の心をずつとしめていきますから、それだけに敏感なんです、自然の美しさ、自然の移り変わり、ものの哀れ、侘とか、寂とか。これは非常に日本人のいい感性なんですけれども、それだけでしたら、これは何か弱い。弱くて滅びゆく美しさなんです。滅びゆく美しさで、「ああ……」と、こういう詠嘆の声は出てくるんですけれども、「やるぞ！」という、翼を張って天へ昇って行くという、そういう底力はなかなか出てこない。

それを下さったのがキリストなんです。「キリスト」というと、何か「ヨーロッパ」という印象をお持ちかも知りませんが、ヨーロッパではありません。中近東という所はちょうど東と西の真中です。お釈迦さんはインドでしょ。インドそして中近東、そういう所はむしろ、自然環境は厳しい所だと思う。そういう厳しい所で、時には物もなく、食べる物も不足している。そういう所から生まれてきた。ということは、人々は生活するのが本当に大変だったと思う。飢餓と病との戦い。そういった自然的な、我々の命を維持するパンに必死になっている所に、しかし、

「人はそれだけではないよ、もっと尊いものだ。もっと永遠を求める何かを既にい
ただいているんだよ」

と。そして、それを単なる願望ではなくて、本当に下さった。キリストは私たちにそれを下さった。イエスがおおいになつた時は、それは本当に

「希望はこれだよ」

と言って、お示しになつたけれども、それは現実化してしまいました。イエスというお方において。だから、クリスチャンは常に厳しい現実にあふつきながらも、それを突き抜けていく底力をいただいている。これはいただいたんです。自分の修養によつて得てきたものではない。これは賜りたるものなんです。

そういうことで、私たちは自然を見て、非常に美しいなと思う。私なんかもアルプスの山々を眺め、二千何百メートルの山に登って、その大自然の美しさ雄大さに凄く心を打たれると共に、同時に我が身の儂さを物凄く感じるんです。何たるコントラストかと。

「悠久なる自然、一輪の花の美しさ、それに比べて自分が一体何だろうか」
ということ。

しかし、「何だろう」と嘆くのではなく、その中に溶け込もうとした。そういう自分の儂さも、自分の駄目さ加減もすべてを捨ておいて、とにかく今、美しいものと本当に一如になつて我を忘れたい。その感情の中に、瞬間であつても生きたい。そういう思いをもつてまた山をくだるとか。そんなのが私の青春だったんですけれども。しかし現実には儂い、自分自身が醜いでしょ。そういう、過去に対する悔いと、未来に対する不安、その間のサンドイッ



チになって、現在は少しも充実しない。今のことに本当に力を注げない。取り越し苦労ばかり。それが福音にぶつかって、

「明日のことを思い煩うな。いや、思い煩わなくていいように、私がして上げるから、大丈夫だ」

という神さまの、キリストの言葉は全部、保証付きなんです。

「私がそれをして上げるから、大丈夫だ。一つだけ条件がある。本気で受けとるか。あなたが本気なら、私も本気だよ。いや、私が本気だから、あなたも本気になれ。どうだ」

と言つて、キリストが迫つてくださるんです。

若い方々はいろんな悩みがあると思う。悩むことは若者の特権なんです。悩むことから逃げてはいかん。同時に、そういう人格に出会うこと。それは地上の先生でもいい。本心に心から尊敬し信頼できる人。それに自分を預けてしまつて、たとえそれが間違つても、自分は悔いはないと。そういうふうな師と呼べる人に出会うこと。その師と呼べる方は歴史上の人物でも結構です。イエス・キリストならなお素晴らしい。その出会いなんです。親鸞上人が法然さんに、そのようにして命を預けたんです。

「法然上人の教えに従つて、たとえ自分が地獄に堕ちてもさらさら悔いはない。どうせ私は地獄行きの身なんだから」

と、開き直つてしまった。さんざん親鸞は修行して、苦勞して苦勞して、それでも平安が得られない。法然という善き人の仰せ、これは弥陀の本願を信じて、「南無阿弥陀仏」と称えればそれで天国です。仏さんの世界に入れていただける。それ以外に道はないという。自分のやることは全部尽き果てたんです。尽き果てて、残っている所は、放つておけば地獄へ落ちるといふ、自分の耳にそういう御声が聞こえてきたわけです、法然さんを通して。弥陀の本願を信じて念仏を称える。「南無阿弥陀仏」だけでいいと親鸞はそれに飛びついたわけです。他のお弟子が心配して、

「昔はあんたは随分修行して逞たくましかったのに、今のあんたは何だ。何かといえよ、

南無阿弥陀仏と称う。そんなことで、もしそれがウソだったらどうするの？」

「ダメでもともと。自分にとっては地獄が必定ひつじょうの、必然の身だ。もしも、法然先生が言つてられる通りのことが本当だったら、こんなありがたいことはないではないか」

と言つて、彼はもう法然さんに自分を預けた。法然からみれば、「親鸞こそは」という師弟の関係ができました。私は時々、

「法然・親鸞は小池・奥田だ」

と言っている（笑）。そういうふうなんです。

科学の証明ではありませんから。科学で証明されたものは、これだつて命懸けですよ。



宇宙へ行くのに、

「間違いない。この科学の法則を信じて、その通りやれば宇宙へ行ける」

と。ドーンと、それで失敗したらもう命はありませんね。スペースシャトルが失敗して、いつかダメだったことがあります。けれども、やはり科学——それは人間の方にどこかにミスがあつたからです——科学そのものが証明してくれていけば、間違ではないといつてまた次々と、いかに科学の法則にピタリと即していけるかということ、相変わらず宇宙へ行くわけです。科学だから当然だと、皆さんは仰るかもしれないけれども、やっぱりそこへ賭けるといふものがあるわけです。飛行機はいくらも落ちていきます。それはどこかに何かミスがあるから落ちる。そういうように、科学もその法則通りにいけば、宇宙へ行ける。けれども、その法則を適用する時に、どこかで点検ミスがあつたりしますと、それはダメ。そして最後はもう点検して点検してミスはないと信じて乗り込むしかないわけです。だから、人間の求めはすべて信じてやっっているわけです。電車に乗ります。この電車は点検が行き届いていて、絶対に事故はないと信じて乗っているわけです——そんなことまで自覚して乗っている人はないでしょうけれども——「今日は事故に合わない」と信じて、道路を歩いて行くわけです。そこへ変な暴走族がぶつかってきたら、もう吹っ飛んでしまいます。もう危険がいっぱいでしょう。そういう所でも私たちはやはり信じて生きているわけです。それを少し自覚するならば、

「主さま、試みに合わせないで、今日一日をお守り下さい。悪しきものから守ってください」

という祈りが必然的に出てこざるを得ない。それが空しき祈りではなくて、保証して下さる方がいらつしやる。見えない霊界に、天界にその方がいてくださつて、しかもその方は地上に来てくださつて、それから贖いという仕事をし終えて、そして

「あなたたちのために所を備えに行くから待つておれよ」

と言つて、天に上られた。そして今度は、行きつばなしではなくて、帰つてきてくださつたでしょ、聖霊という姿で。皆さん一人ひとりの中に霊なるキリストが帰つて来てくださった。そして、天界のキリストと内なる霊なるキリストが絶えず繋がつて、交信しているわけです。それが私たちの現実です。現実なんです、^{まぎ}紛れもない現実なんです。

私たちは、

「天界はどこにあるのだろうか？」

と。どうしてもやっぱり天を、高い所を思います。それは正しいと思います。キリストも祈られる時、手を挙げて、目を天に向けて、「父よ」と祈つておられた。私たちの意識においては、霊界の天、大空を思うのは正しいと思います。しかし、物理的に考えて、この宇宙の彼方に何も無いかも知れません。だから、

「霊界の天、あるいは霊界というのはどんな所か？」



というのは、こういう三次元に住んでいる私たちには想像できないことですけれども、しかしながら、一番近い想像としては、天高くという、天に向かつて——太陽が天高く輝いてくれますから——そういうふうを意識することは間違っていないと思います。

とにかく、そういう世界が実在していて、全く間違いがないということ。それは私が思うからでなくて、向こうの方から、「そうなんだよ、そうなんだ」という証拠をつきつけてくださっている。それが新約聖書であり、代々のキリスト者たちはその証拠を信じて歩いてきた人たちなんです。小池先生もそれを「信じて」というよりも、「圧倒されて」生きていました。

「私は霊なるキリストに圧倒されて生きています。信じるなんて言いたくない。生なまの現実だから」

と、そういう思いで駆け抜けて行かれた。

●第二章 天路 「はじめに」

今日はこの『無の神学』の第9回目です。昨年は11月17日に「新宗教改革」という所を最後にして第一部を終りました。今回からは第二部ということで、「無の神学への道」です。「道」というのは、どこから来てどこへ行くという、出発点があり終着点がある。先生がどうして晩年のような心境に到達されたか、それを思索という面——先生は結構、哲学的な思考のお好きな人です——非常にロマンティックな面と、それから哲学的な思索の面と両方をお持ちの方です。情感豊かであり、かつ非常に理論的に哲学的にものを考えるというお方です。

215頁から「第一章 祈りの宗教哲学」というのを書いてますが、これは本当に若い時の先生の思索を文章化して、それを机の引出しに入れて公表されなかった。それを晩年に公表されたものです。この「祈りの宗教哲学」は本当に若い時の、ご自分のメモのようなものでありますので、私もずっと読ませてもらいましたけれども、まだまとまりとか、そういう面ではもう少しという感じがしました。非常に若い時の先生の思索の結晶だということとで、これはひとまず置かしていただいて、229頁の「第二章 天路」から始めたいと思います。

この「天路」の「はじめに」というのは後から付け加えた文章です。最初は231頁からのものが最初の文章だったと思います。ただどうしてこれをここへ持つてこられたかという、それが「はじめに」の所に書かれていますので、そこから始めていきたいと思えます。できるだけ文章を読みながら、そして私の感想などを加えながら、皆さんと味わってほしいと思います。

《第二章 天路

はじめに



本章の「天路」の原型は、一九三七年十月一日、信仰の恩師藤井武先生の第七周年記念講演会（日比谷公会堂で、故伊藤祐之氏の司会により、今は亡き矢内原忠雄、金沢常雄両先生と講壇を共にした）で「別の路」と題して語ったものである。

先ずこの日付を見てください。「1937年」とある。先生は1904年2月のお生まれですから、33歳8カ月でこういう講演を、矢内原先生とかそういう方々と伍して堂々となさっている。先生はやはり17歳の時（1921年）にお兄様を亡くされて、それからしばらくして水戸高等学校へ入られて、そして一時病を得て東京へ戻られた。内村鑑三の門を叩いた。それから、お兄さんの遺稿の整理なんかで藤井先生の所へお出掛けになるようになった。そして定着なさったのが1925年です。お兄さんが亡くなられて4年後です。なぜ先生は1925年かというと、1930年に藤井先生は天界へのぼられました。その年の3月26日には内村鑑三が天界へのぼられた。1930年、昭和5年というのは、二人の信仰の先輩を天に送った年なんです。先生はいつも

「私は5年間、藤井先生の所に皆勤した。一回も休んだことがなかった」と誇らしげに語っておられた。だから、お兄さんが亡くなられた4年後の1925年から正式に藤井先生の門を叩かれた。その始めの4年間は暗中模索の時代ですね。特に病気の時に内村鑑三の『宗教と現世』という本を、多分お兄さんの本棚から取り出して読まれて感動して、内村鑑三の講演会に出られたというようなことが書かれています。

そういうことから、1921年17歳でキリスト教に接させられて、そして4年後に藤井先生の門を叩かれた。そして、5年間、藤井先生の所におられて、それから7年経った時にこれをお話になっている。7周年に。ですから、藤井先生の所ではその時以来、12年経っている。12年間の思索があると考えていいでしょうね。

私は、小池先生が33歳でこういうことを語られて、一方で凄いと思います。と同時にやはり、若い人が聖書に触れて、自分の知らない世界に導かれた時に、本当に必死になってそれを追い求めるんですよ。自分の経験でもそうです。始めの数年というのは本当に夢中で追いつめていく時代があります。同時に、思索する人は徹底的に思索します。だから、それがこういう形で先生の文章となつて残つたのだと思っております。次を読んでいきましょう。

福音は霊的な有機体的なものである。特にヨハネやパウロは霊的神学的な要素を深く備えている。福音を深く考察し、追求する霊的神学的な思索と告白とは、信仰の健全なる展開のため、あつて然るべきものと考えている。そういう意味に於て、霊的神学的信仰告白は、私の信仰歷程を、霊的神学的に語るものであるから、この「天路」を第二章として順次歴史的に信仰告白を掲げることにした。

この「霊的神学的信仰告白」という言葉は後の先生の言葉です。当時において果して「霊的」ということを仰っていたかどうかはわからない。「神学」ということは、非常に先生は早くから意識しておられた。それは高等学校の時、佐藤繁彦先生というルターの研究家の博士



論文に触れて、非常に感動された。そして、

「神学というものはこういう素晴らしいものか」

ということに気づかれて、自分も神学の道を辿り始められた。その頃、無教会では「神学」ということは言わなかった。むしろ、神学を退けた。

「神学は信仰の邪魔になる。信すべきものであって、そんな知的に学的に考えだすようなものではない」

という思いから、無教会では神学ということは非常に排斥的な雰囲気があったと、先生は言っておられました。ところが、先生はその佐藤繁彦先生にぶつかって、自分でもその歩みをただ独り始められた。

私が行われている「神学的」という語の上に、特に「霊的」という語を冠したわけは、従来の神学が概して聖霊という重大な要素を希薄にしているの、キリストの福音の本質に即せんとする神学の性格を明かにせんためである。

ここに「聖霊という重大な要素」という。これも後ほど発見されたわけです。先生が自覚的に「聖霊」ということを言いだされたのは1950年のあの体験以来です。それまではあまり出てこない。

これよりさき、一九三二年に

1932年は私が生まれた年です。まだ私がおっぱいを吸っていた頃に、先生は「祈りの宗教哲学」というのをお書きになったんですね。

「祈りの宗教哲学」と題して草した祈りの考察の文があったので、これは神学以前とでも申すべきものではあるが、第一章として掲げた。今にして想うと、何よりも先に「祈り」の問題と取っ組んだことは、やはり神の不思議な御導きで、主の御本願をしみじみと有難く思う。その後、祈りに関して聖霊のバプテスマを私は体験したからである。

第三章の「砕けの神学基礎論」の原型は「終末の実存者」と題して、一九四八年十月一日、同じく藤井武先生の第十八周年記念講演会（早稲田大学のYMCA主催、早大経済学部教授故酒枝義旗氏司会により、故矢内原忠雄先生と講壇を共にした）で語ったものである。藤井武先生は、神学的探究を志されて、幾何もなくして斃たおれられたが、別に先生の遺志を嗣つぐというわけでもなく、神学的追求は私の傾向の中にもあるので、爾来じらい続けて来た。拙論「第二章」において、人生の歩き方に三つの路を省察し、第三の路として神を主体とする信仰の路を告白し、「第三章」において贖罪のキリストを、「砕け」という概念をもって解明し、十字架の「砕け」の恩恵にあつての実存は、終末論的に自覚させるべきものとした。」

さつきから申していますように、これは神学の文章ですから、やや理屈っぽいところがあります。でも、そういう神学という——我々は知・情・意の三つをいただいているわけですから——知の面が神学となって表れてきます。つまり、論理的、哲学的に思索していくとい



う面です。

「人間は考える葦である」

といわれますように、考えるというところが人間の、ある意味では特性でもあります。それと情感的な面は芸術というところで花開きます。それから、意志的な面は倫理道德という、実践的にこの社会を形成していくという面が出てきます。そういう知情意の働きの大事な面ですけれども、それが信仰の面においては、神学という事で展開していく。

神学というのは決して信仰を邪魔するものではなくて、むしろ助けるものである。方向を示すものである。それがしつかりしていないと、およそ宗教というものは、何でもかんでも可しということになってしまいうるであらうです。世の中には恐ろしい宗教がいろいろあるわけです。そのとき一体、安全な健全な宗教と、それから危ない、あるいは誤った、人を滅びに導き、陥れるような宗教を、どうやって見分けていくのか。それはやっぱり神学というものがしつかりしていることによつて、見分けがつくわけです。直感でもできませんけれども、その直感に根拠を与えてくれるのが神学的思索というもので、キリスト教もずっと旧約以来、歴史を重ねています。そして、キリスト以来また二千年という歴史を踏んできています。それを辿つてハッキリと方向付けをする。「この道で間違いない」という、そういう方向付けをしてくれるのが神学というもので、そういう神学でありたいというのが先生の悲願です。それを先生は「霊的」、「それから「ドグマテシユ」(dogmatisch)「教義学的」でなくて、むしろ「有機体的」「オルガニシユ」(organisch)という言葉を使っている。あるいは「ドラママーテシユ」(dramatisch)「劇的」という。人間の身体が有機体であるように、神学も有機体的構造を持った立体的なものであつて、しかもドラマチックに展開していく、そういうものだということを先生は叫んでおられました。

●路にはだかる三獣

さて、本論に入りまして、「三つの路」とは何であろうかということをお、ダンテから引いておられます。

《路にはだかる三獣》

聖書の扉に「迎えらるべき者の我が家族我が親類に我一人ならぬを祈りて、1918・2・11、政美」と書き記したまま一九二一年九月、北京で客死した兄の祈りが、私をして藤井先生に師事させる一つの路しるべとなつた。大学時代から先生に学ぶことと五年、そして先生もまた一九三〇年七月に去つた。しかしこの五年が私の魂に「隅の首石」を礎えつけたのである。この五年は私にとって、ある過去の一時期と云うが如きものではない。その意味は私の生涯と共に成長して行つたものである。それ故に先生を回顧的に想うことは、本質的態度ではない。私の兄や先生は私にとっては現在の存在であり、それ故にまた永遠的である。神を信じて生きた人々の死と云うも



のは、別な生を知らせる一つの秘鍵のようなものである。

今ここに語ろうとするとき、私は平常の生活様式に対する自責の念を深うし、自己否定の心を新たにせざるを得ない。

「平常の生活様式」というのは要するに、「日頃の自分を顧みれば」という、

「日常の自分というものをつらつら見れば、こんな所に立って偉そうに話できるよ
うな身では絶対にならない」

という、まずそれを言っておられる。でも、「なぜここに立つか？」という、それがここに
出てきます。

自己否定の心を新たにせざるを得ない。神の審判を仰ぎ、みゆるし 聖恕を乞うことなしに口を
開くことは出来ない。告白的態度が私のすべてである。そこには人が私を審くべき余
地がない。かくて神に審かれたる私はおそれなく語ることをゆるされる。こうして信
仰を告白することが聖名の栄光のためならんことをのみ祈る。

これが書き出しです。それから次に、今の自分たちの身の回り。1937年、昭和12年
といえますと、支那事変が始まった頃でしょうか。そういう時です。大正期が過ぎて、そ
れから時代が段々、昭和23年頃の大恐慌、2・26事件とか、5・15とかを通じて、段々怪
しくなってきたときです。それからまた、経済的な社会的な面をみますと、かなり頽
廢的な雰囲気、それから経済至上主義的な雰囲気、そんなものが渦巻いていた頃であらう
と思われます。それを先生は「大バビロン」という言い方をしている。「バビロン」という
のは没落してゆく文明という感じがあります。我々は、キリストの生地からみれば、異境
の地という、そして滅びゆく文明の象徴です。

我々はこの大バビロンに生きて、文明の利器の恩沢を蒙こうむっている文明人である。ま
た凡ゆる文化的機関によって精神的活動を促されている文化人である。生活、社会、
国家、国際等の諸問題が錯雑して我々をとり繞めぐっている。このような外的事象が有つ
さまざまの諸勢力があまりに強いために、現代人の魂は、一面高揚的氣勢を示すにも
拘らず敗滅への路を辿っていると思われる。

この数行を見ましても、何だか現在と良く似てますね。

「生活、社会、国家、国際等の諸問題が錯雑して我々をとり繞めぐっている」
という。現下の情勢は正にそういう情況です。その一つ一つに真剣に取り組んでいたら、
それだけで疲れてしまいます。私たちはその中であって何を根本問題とするのか、それが
次の問題です。

ここにおいてか我々は、魂の生き方の問題を真剣に問わなければならぬ。それは
時代と民族とを越えた根本的、普遍的、礎定的問題である。個人の魂の生き方の問題
はすべての精神活動の根底的問題である。一つ一つの石が然るべき位置を堅持するの
でなければ石垣は崩れ城は倒れる。一つ一つの水滴が充分に光を反射させるのでなけ



れば、あの美しい虹は現われない。そのように個人の魂の問題はいかなる時にも顧みらるべき重大性を有つ。外的解決が当座いかに成功し、いかに精神的に見えても、もし個人の魂の問題が真に徹底的に解決されていないならば、いつかは必ず崩れるときがくるであろう。これに反して、外的にはいかに失敗や危険や矛盾があろうとも、真に剣に堅実に魂の課題を解決して行くならば、必ずや最後の勝利があると信じてよい。

ここまででのごとく、私の育った戦後の時代を申しますと、非常にマルクス主義が盛んになりました。戦後焼け野原、パンも何もなかった時代、そのときには、

「食う物もなくて、何が魂の問題だ!？」

と言って、マルクス主義がずっとまた台頭してきた。今度、「昭和元禄」と先生の作品の歌にありましたように、高度生長を遂げてきますと、

「これだけ豊かになつて、なぜ神さまが必要か。精神的問題なんかどうでもいい」

と、また経済大国になりました。常に魂の問題は隅に追いやられていました。それから、東西の緊張がありました。東と西、アメリカ的な文明と、中国・ソビエトの共産主義諸国との対決がありました。そういたしますと、戦争と平和とか、そういう問題が最大の問題となつて、魂の問題はまたそつちのけにされた。

「アメリカが造る原爆は汚い原爆で、ソビエトとか共産主義圏の造る原爆は清い原爆だ」

と、そういうことを本当に知的な人は平気で言っていた。

「キリスト教というのは、そういう支配勢力と結びついて人民を収奪する手段に使われる」

という言い方をされた。そして、

「理想の国の社会主義国、北朝鮮へ行こう」

と、言っていたわけですね。それがあと数十年たつて、段々、欺瞞であることがハッキリ証明されてきました。けれども、その当座は、本当に「インターナショナル」の歌がうたわれ、メーデーになりますと、「労働者の祭典」だといって、華やかにあちらこちらを赤い旗で埋めてということ、そういう時には、

「キリスト教なんていうのは阿片だ、人を麻痺させるアヘンである」

と言って、白眼視されるといふことがあつた。時代がどう変つても、絶えず魂の問題といふのは何か隅に追いやられる、そういう状況にあります。

ですから、ここで1937年、今から65年も前のことですが、あまりにも似ている状況を感じている。その中で先生が言いたかつたのは、周りの状況が如何であれ、人間が人間であるかぎり、この魂の問題を隅に置いて何を解決しても、それは幻、虚栄、幻影、あるいは砂上の楼閣と申しますか、徒花あだばなにすぎない。根本問題をぬきして、いかに外的繁栄を築き上げて、それは一挙にして消え去るようなものではないか。



それに反して、何を言われようと、本当の人間が人間であるかぎり、魂の問題は捨ておけない。ちょうどキリストがああ飢餓の極みにおいて、

「石をパンにしてみる」

と、そう言つて嘔なげきかけたサタンの声に対して、

「人が生くるはパンのみによるにあらず。神の御口から出る一つ一つの言葉によつて、神の言葉こそが人を生かしめるものである」

と言つて、断乎拒否された。つまり、いかなる状況の下においても、人にとって最も大事なものは人を活かす神の言葉である。あるいは魂の問題を解決しないで、いかなる繁栄があつても、それは単に「ヴァニティフェア」[Vanity Fair 虚栄と歓楽に満ちた現世]、虚栄の一つにすぎないということをごくに叫んでおられる。そのことをどうぞ、心にとめていただきたい。

魂の生き方の問題が根本問題である。それではどういうふうな魂の問題に迫っていくのかというのが最後の3行目です。

さて然らば、個人の魂の問題はいかに問われねばならぬか。魂をもつ人間と云うものが倫理的な人格的存在であることに異論はない。いかなる意味においても人格というものを認めない者があるとするなら、それは論外である。

「魂」といつて、その次に我々が自覚するのは、「倫理的存在としての人間」、善悪を判断し、善を選び悪を退けるといふ根本的な欲求を持った人間、そういうふうな恵まれている。人間は必然的にそういう善への志向を持っています。それを願う。ところが、それが現実にならないというところに、苦しみが生まれてきます。そういう倫理的な存在としての人間、道徳的あるいは善悪を見分け、善を選んで悪を退けていきたいという人間、そういう人間を今、取り上げようとしているので、もうパン問題というのは忘れてください。他のことは忘れて、今は人間の根本は魂だ。しかし、魂の問題を自覚するとき、先ず倫理的な道徳的存在としての人間を自覚する。善でありたい。善への意志。ところが、現実にはなかなかそうはいかない。そういうところから出発する。

出てくるのは、カント、ダンテが出てきます。カントは哲学的に徹底的に追求した方です。そういう善の問題。カントは「善意志」に、「人間の中にある善への意志、これだけが無条件に尊いものである」と、そういう結論に到達した。

カントに従えば、この人格の中心は意志である。彼は冷静にして且つ熱烈な語調を以て宣言して曰く、「此の世界においては何処にも、然り更に此の世界の外においても、無条件に善と見みな做なされ得るものは、唯善意志を措おいて外に考えられない」と。

「善への意志」なんでしようか、「善なる意志」なんでしようか。ドイツ語では「グーターヴェイル」(guter Wille)、「善意志」といふ。

そしてカントは周知の如く、意志の根柢たるべき道德律を、普遍妥当なる、絶対無上



命令として把握した。

カントの言葉を先生はよく引かれました。

「つらつら思えば思うほど、私の胸を打つ二つの律がある。星辰の天と、それからわがうちなる道徳の法則。この厳かさに私は、しばしば思えば思うほど、驚嘆の念に打たれる」

という言葉をかントの言葉として先生はよく引いておられた。星空の輝く天、つまり宇宙の法則、天界の法則、自然法則、それからわが内なる法、わが内にある道徳的法則、この二つが私を捉えて離さないという、そういうカントの気持ちです。ですから、ここにも、

「意志の根拠たるべき道徳律、普遍妥当なる、絶対無上命令」

これにはつべこべ言わない。これがもう絶対だといって、カントは道徳律をボンと持ってきたわけです。しかも、カントにとつては、それがかなり実現可能ということなのです。

「可能・不可能を問わずそれが最善である」

ということ、バーンと前に打ち出されていたようです。

即ち彼は、一切の感性的なものを断然たる意志を以て斥け、ひたすら道徳律への畏敬の念から、全く義務観念から、すなわち真の自由に基づき、自律的意志を以て普遍妥当の法則に従わんとするとき、彼はその心を善意志として発見したのである。

この「義務観念から、すなわち真の自由に基づき」と、ここがおかしいでしょ。普通、義務というの、強いられてやるもので、自由と義務とは反対みたいなものでしょ。ところが、このカントにとつては、

「聖なるものに従うという自由がある。それは本当の人間の自由だ」

という、「必然に服することが自由である」という気持ちでしょうね。だから、本当の自由に基づいて、自らの自律的な意志をもつて、人から押しつけられずに、内なる法に従ってこの普遍道徳法則に敢然と従うところに自由もあり、人間の尊厳もあり、そういう従うという意志が善意志という。「そうやれば幸福になれるから」とか、「そうやると何か気持ちがいいから」とか、そういういわゆる理由付け、動機付け、それを一切拒否する。道徳法則はそれらを絶対に受け入れられない。だから、無条件にする。好き嫌いの問題ではない。そういうのがここに言われていることです。

善意志の善なる所以を説明して、功利主義的、幸福主義的観念を斥け、あらゆる条件的な「徳」から峻別し、一般常識において称讃されている徳と云う如きものの真相をつきとめ、一切の不純なものを指摘し、善意志はその目的や結果によって評価されるものではなく、それ自らにおいて無条件に善であり、宝玉の如く燦然としてそれ自体光を放つところの全価値を有するものであると断じた。

つまり、結果はどうでもいいと。善意志はそれ自体、尊い。その善意志とは、いかなる欲望からも離れて、ただ道徳法則を尊重して、それに服したいという純粋な気持ちで、そこ



に自分を投げ出ししていく。その善意志だけが尊い。結果はどうでもいい。そういうことです。これは哲学的な一つの結論かも知れませんが、現実なまみに生身の人間にとつては不可能を強いるものですね。でも、私はそれを応用して——小池先生も時々応用して仰います——失敗しますね、人は。善意でやって失敗します。失敗を責めるのではない。善意でやったという、その善意志を見て、その人を咎とがめない。

「よくやってくれた。結果はまずかつたけれどもね」

と、こういうことなんですね（笑）。そういうふうには私は応用可能だと思えます。私のために御馳走を作ろうと思つて一生懸命にやってくれた。私の奥さんが他のことに気をとられて、気がついてみたら、お鍋の底まで焦げていたと（笑）。善意志でやってくれた。それでいいんだよ。……現実的にいうと、この善意志で人間は生きられないです。

しかしながら、彼の所謂いわゆる人格性における善意志は、実践理性の存亡に関する直接的体験であるにもかかわらず、

彼自身が実際にそれを実行しようとして、単なる理知の世界でなくて、本当に自分の現実の生活の中でそれを実践しようと思つて格闘して到達した結論だ。ということであるにもかかわらず——それが直接体験ですね——

なお抽出された理念としての先験せんけん的概念であつて、

「アプリアリ」[a priori]より先なるものから]つまり経験以前の指定された概念であつて、かなしいかな現実の人間に存在する力ある実存的なものではない。

それは「観念論的観念論的な」とかいわれる所以なんでしょうか。

なんとすれば、我々の意志は根本的にその自律を害そしなわれ、従つて自由を失っているからである。

ここにカントは気づいていないのではないかという指摘なんです。この善意志は、それは指定はできますよ。けれども果して、現実はそのなかに善意志の存在なのであるかと。そしてもうちょっといきますと、仮にそういう善意志というものが一方に有るとしても、それを引きずり下ろそうとする悪意志というのもまた自分の中に有るではないかと。自分は善意志だけの存在なら、それはいい。けれども、人間には逆の力が働いて、パウロのように、

「わが欲する善はこれをなさず、わが欲せざる、わが憎む悪はこれをなすなり。」

ああ、われ悩める人なるかな」

と。これが生身の人間ではないか。だから、カントのように楽天的に、

「かくありたい。故にあり得る。かくなすべきである。故になし得る」

という、「ゾッレン」(sollen)「べき」と、「ケネン」(können)「できる」というのが常にカントにおいては一致するんですね。しかし、人間はそんなふうにはいかない。「ゾッレン」があつても「ケネン」が伴わないという嘆き、これが今度はダンテで出てくるわけです。

それ故に純乎たる善の実質を失っているのである。あるべき善意志の尊厳なる品位の発



見が実に喜ばしきものであるだけ、その現実的実質の喪失は一層悲しき発見なのである。カントはあるべき人間の自律的意志の尊厳を敵として弁護したけれども、彼の根本悪の観念はついに不徹底に終った。人間の実践理性と抗争するものは単に感性的な人間性ではなくして、

彼は、感情的なものとか利己的な動機とか、そんなものは退ける。しかし実は、彼が善意志と言うその意志そのものの中に、善意志に逆らおうとする別の意志が働いているではないか。人間の意志そのものがこの善意志に戦っているのではないかと。

実に人間の意志そのものであることを我々は徹底的に見極め、自覚しなければならぬのである。

さて人類が古来産みきたりし真剣な魂は、必ずや道德問題を問題中の問題として、これと戦った人々であった。その最も著しき一人にダンテがある。

神曲第一歌に告白されているところによれば、人生の旅路半ばに（三十五才）、彼は正しき道を失って、暗き森の中にいた。漸くにして林を遁れ、ある山の麓に来てみると、山頂には太陽が輝いていた。光を目指して彼はその山に登ろうとした。然るにそこには道を遮ぎる三つの獣がいて、彼を脅かすのであった。その一は肉慾の牝豹であり、その二は傲慢の獅子であり、その三は一切の慾を荷つと見える牝狼であった。

「牝豹」は肉慾の象徴、「獅子」は傲慢の象徴、「牝狼」は強欲、経済的な欲の象徴。肉慾とそれ以外の欲を荷っているのはみな牝なんです。獅子は男性なんでしょうね。だから、男は傲慢、それから女性には申し訳ないけれども、男性の目からみて非常に誘惑的存在なんでしょうか。経済的な欲というのは男女に問わず、人間の生存に関わりますので。ところが、キリストはそういうおおよそ傲慢というものからほど遠い。砕け、平伏しです。それから、経済問題に対しても、サタンは

「私の前に拝跪するならば、頭を下げるならば、この世の栄華をみんなあげる」

と言って、高い山の上から町を見せた。それに対して断乎退けて、

「神のみに従う」

ということをなさった。ダンテはそういう三つの獣、豹・獅子・狼が出てきて、これにたじろいてしまった。

この慾の権化たる狼のため遮ぎられたとき彼は嘆いていった。

「その姿より出でし恐怖により、狼がいたく私を圧したので、高きに登る望みを私は失った。欣然として獲るも、時いたってこれを失い、想いを尽して泣き悲しむ人がある。平和なきこの獣が私をかくならしめ、私に向い来り、終に私を太陽の黙す方へ押しかえした。」

実にダンテはこの「平和なき獣」なる慾との戦いに惨めにも敗れて絶望の悲しみにとざされたのである。一人の人間がそこまで真剣に戦い、しかも敗北がすべてである姿は、



これを無関心な眼を以て眺めることが出来ないのである。

このような事実を、詩人の誇張であるとか、詩的表現であるとか思う人は、未だ人間の慾と云うものがどれほど深く人間の中心に喰い入っている抜くべからざる根であるかを知らないのである。ダンテはある人々の考えるような詩人ではない。かつて内村鑑三先生がその日記にしているして、「ダンテもミルトンも芸術家として見らるることを嫌う事は余の保証する所である。彼らは詩人であるよりは寧ろ人である」

つまり、魂を持った人、人生問題と格闘した人、道德問題と戦って苦しんだ人、そういう人である。

と云われたが、実に言の最も深き意味において、彼は人であった。

かくて彼が大いなる荒野に押し返えされて絶望と孤独にたたずんでいたとき、彼の眼前に現われたものがあつた。彼は思わず声を挙げた。

「影か真の人間か、いずれにもあれ、汝私を憐め」と。

そのとき彼の心は泣いていた。大きな男の涙である。我々は単なる道德的修養に甘んじ得る世界からはこの涙を見出し得ない。

道德的修養をやつていて、「修養をやつていいからいいじゃないの」と、そういうことですね、その中に埋没して安心している。そういう世界からはこういったダンテの涙は見出し得ない。

孔子はついにこの涙の人ではなかつたのである。逆説的に言えば、ダンテが失望落胆荒野に行き暮れたこの惨めな姿は、彼の義に対する熱烈なる思慕と罪に対する峻烈なる嫌悪とが、いかに比類を見ぬほどのものであつたかを物語るものである。さればその峻厳なる批判を自己自身にまず向けた彼は、実にわが身の救われ難き姿を発見して、驚愕と——「血脈がふるえた」ほどの、——悲歎にくれたのであつた。

彼はさらに続けて書きしるしていつの日に、

私の泣くのを見て彼は答えた。

『この荒れし処より逃れたくば、

別の路を汝は択らねばならぬ』

「別の路」である。

太陽に向かつて登ろうとした。そこから引き下がって、泣いていた。そしたら、ヴィルギリウスが現れて別の路を示してくれた。「別の路」というのは、楽してまた太陽の所へ登って行けるのかと思うと、さきにあらず。逆にもつと恐ろしい路、地獄への路を示された。

かくてヴィルギリウスに伴れられてダンテは別の路 (altro viaggio) すなわち地獄への路を降って行った。彼の指して行くかたには、「滅亡の民」が「永遠の苦患」を荷いつつ住むところの「憂愁の都」がある。そしてその地獄の客観的存在理由は創造主の聖なる義の要求するところである。



義なる神は不義なるものを審かすにはおかれぬ。その審判を地獄という姿で表される。そこで永遠の苦しみがある。それをまず見せられた。

しかも彼が地獄のドン底まで見極めねばならなかった最も個人的内面的な意味は、ダンテ学的解釈は別として、彼が地獄の各圏において

地獄にもいろんな階層があるそうですね。一番深い地獄から比較的ゆるい地獄、段階がある。そのそれぞれの所において

罰せられている無数の罪人において、実は一つ一つおのが罪の姿をまざまざと照らしだされねばならなかったと云うことである。

それぞれの罪の段階がある。そして、それぞれにふさわしい地獄の姿がある。しかし、ここにいる人たちの姿と自分が二重写しとなってしまつて、「あれは私とは関わりがないという人はいなかった」という。そのくらいにダンテは自分の罪の問題を真剣にここで取り組まされたということです。

このことは彼にとつては必要欠くべからざること (necessita) であつた。誠に地獄遍歴はいのちがけの仕事であつた。

しかも見遁^{みぬ}がしてならないのは、地獄における罪の配列の順序である。

これもよく小池先生が言つておられた。罪の中で一番深い罪は意志的罪。故意に人を陥^{おとし}れるとか、人をだまし討ちにするとか、そういう意欲をもつて人を殺す、あるいは人を陥れる、特に善良なる人をだまして絞りとる。そういった意志的な罪が一番深い、重い罪です。ついでに情の弱さにすぐフラフラと罪を犯してしまうということがありますね。魔が差したとか、あるいは余りの女性の美しさについつい心がそちらへ行つてしまうという、感性的な罪は非常に罪の中でも軽いそうです。小池先生はそれを慰めにしておられましたけれども(笑)。肯定はしておられないけれどもまだ軽い方だと言つておられた。

「私は情が深すぎて、愛が深すぎて、それが行き過ぎて」というようなことをよくお書きになつていますね。

意志的な罪、人を意図的に陥れ、そして自分がうまい汁を吸うとか、計画的強盗殺人と云うのはそうです。そういうのが一番深い所にいるという。

すなわち地獄の底に向つて、本能的な罪から意志的な罪へと下降してゆくことである。

どん底には、キリストを売つたユダが居る。

しかし、ユダはそんなに悪い奴とは、私は思わない。先生もここに、

(もつともユダがどれほど意志的に犯行したかの歴史的問題は別として)

と書いている。ユダは可哀相ですよ。私は、ユダは決して意志的にキリストを売つたとは思わない。本当にフラフラとやったと思います。あるいは非常に善意志なんです。ユダの描いていたキリストというのは物凄く賢くて、意志的に強くて、正義の味方であつて不義を打つ、そしてやがてタビデ王国を築き上げてくれる、そういうキリスト像だつた。と

ところが、現実のイエスさまというのは、取税人と一緒にいつも居る、遊女たちやそんな人たちと一緒にいる。姦淫の現場でも赦してやる。全然、凜としたところが無いではないかと。

「左の頬を打たれたら右の頬を出せ。上衣をくれという奴には下衣まで差しだしてやれ」

とか言う。こんな人と付き合いはしてられない、こんな人と一緒に居たら、ついにあのダビデ王国は築き上げられない。そして、香油を注いだ女性を「もつたない！」といつて責めたら、

「責めるな、この人は私のために葬りの用意をしてくれた。この女性のしたこ

とは、福音と共に永遠に伝えられる」

と。「もう自分の思っていたイエスではなかった」ということで彼は、心にいだいていた疑問がついに頂点に達して、敵の方に行ってしまった。後で散々と泣いて、そして自殺したんですね。

「自殺した魂は天国へ行けない」

というふうにかトリック教会では言ってますけれども、私はそうは思わない。とにかく、本当に悔い改めた魂は、いつでも天へ引き上げてくださる。私はそう思っている。ユダの裏切りなくしてキリストの十字架はない。キリストの十字架なくして我々の救いはない。だから、ユダはああいう宿命を授かったとしか言いようがない。でなかったら、キリストはユダを十二使徒に選ばれないでしょう。キリストがユダを選び、そしてキリストのみ思いにもかわらず、ユダは違う方向へと行ってしまった。それが人間の本性なんです。さっきのカントは善意志で、

「善を願って善になりうる」

と彼は断言しました。けれども、現実の自分は、善を欲すれども悪へ行ってしまう。いくら善い導きを受けても、逆の方へ逆の方へと行かしまる力があって、ついにそれに勝てなかった。そして、そのあげくの果ては実に悲惨であった。それが人間の真相なんです。それをユダは示しているにすぎない。そういうユダをも救い上げているのがキリストの愛だと私は思っています。

ユダは近代人の、現代人の典型なんです。賢くて計算高く、情や感性は退けて、ひたむきに経済的な何かを達そうと思つたら、それに向かって突進する。方向はやや間違つてましたけれども、それに向かって突進する。それから絶えず疑つてかかる。信仰の世界では疑いはいけません。けれども、物事の世界で疑いというのは必要なんです。安易に何かを信じて満足しないで、「でも、でも」と言つて疑つていくというのが人間の理性の働きの一つです。だから、そういう人間理性の働きのものと、それからキリストに身を投げかけていくというものと、これは両立するんです。本当にキリストのところに行けば、人間の疑いをも、理性の世界での疑いをも、それを乗り越えて本当に自然界において、またその



他の学問の世界において、本当の所へと導いてくださる。私はそう思っている。

ですから、私は、世間の人が言うほどユダを悪い人間だとは思わないし、ユダが地獄のどん底の一番下にいるとも思わないし、おそらく小池先生もそう思っておられると想います。自殺は、確かに自分で自分の命を絶つということは、神さまに対して申し訳ないことです。神の下さった命を自ら絶つというのは申し訳ないことですけれども、その弱さをもキリストはどん底で荷い上げてくださっているにちがいない。要は、人間の魂がどこかの瞬間で「悪うございまして!」

と言って本当に碎けて平伏すかどうかなんです。あの十字架の一方の盗賊がそうでした。

「私は散々悪いことをして、今はこの仕末です。十字架で極刑を受けるのは私にとつては必然です。そのくらい私は悪い奴でした。でも、あなたは違います。

だから、主イエスよ、あなたが天界にお入りになる時、横にいたこの大罪悪人である私のことを覚えてください。」

と。その時、イエスは

「汝、我と共にパラダイスにあり!」

と。そういうことで、私は、キリストのお心というのは、どんな大悪人であつても本当に碎ける魂、そして

「あなたに従つて行きます!」

という魂を救い上げなされると思つている。

一番酷いのは、ここに書いてます反逆天使、これがヨハネ黙示録をご覧ください。人を騙し続けてきた龍、それが叩き落とされるというのが黙示録に出てきます。人類を惑わし続けてきたこのサタンとも呼ばれ、何かと黙示録に出てきます。それが一番どん底ですね、第二の死というものを味わされる。

……彼が人間性の意志的方面において罪の最深なるものを観たことは極めて注目し値する。ダンテ自身が極めて意志的な人間であつただけ、彼の魂は深きなやみを経験したに相違ない。

カントは道徳の理想を掲げて意志に勝利あらざるべからずと説いた。ダンテは道徳の現実に直面して意志の矛盾に苦しんだ。藤井先生がダンテに就き「我らは実に彼の存在そのものの上に、宇宙の深刻なる不調和が曝露せられているかのように感ずるのである」と言われたよつに。

我々はかくてダンテの登山不可能において、自律的道徳の途——我々が儒教的教育のもとに学んで来た途——自己完成の途の不可能なるを示された。我々はしかし、もう少し立ち入った批判を試みなくてはならぬ。すなわち、山に登ろうとすること、すなわち神の完きにまで到らんとする努力そのものが可能なりや不可能なりやの問題よりむしろ、かくの如き路の辿り方そのものが一体義しきや否やの問題である。すな

わち所謂道徳の路を辿ることの可否の問題である。

ちよつとここで立ち止まります。「至高善」と言いますと、これは神さまの世界ですね。キリストは神さまを善と言われた。

「私は善ではない。善き方はただひとりだ、神のみだ」

と。至高善、これがさっきの山の彼方に輝く太陽だった。それを目指して行ったわけです。カントは善意志、これで行ける、断然登れるという。人間はそういう尊い存在で、そこに人間の尊厳があると言って、高らかにそういう意志の勝利を歌った。

ところが、ダンテは登ろうとしたが、遮るものさげかきが、立ちはだかるものがあつて、戦おのいてすごすご引き返してみたら、地獄へ向かう路だった。彼は敗北の絶望感にとらわれて、さめざめと泣くわけです。そういうことが歌われています。

カントにせよ、ダンテにせよ、ここではそういう道徳律とか、それに従つて高きを目指して登つて行こうとする自律の路、これなんですね。ここに書かれていますのは、

「ダンテの登山不可能において、自律的道徳の途の不可能なるを示された」
と。更に先生は次に言われる。

「神の完きにまで到らんとする努力そのものが可能なりや不可能なりやの問題よりむしろ、かくの如き路の辿り方そのものが一体義しきや否やの問題である。すなわち所謂道徳の路を辿ることの可否の問題である。」

と。可能か不可能か。カントは可能だと言う。ダンテは体験的に不可能だと言う。そういう可能、不可能を問うていること自体が一体正しいか。つまり、ここで成功するということとは何かというと、自分が自分の力で自力で、神の高みに対し自分の限りがある路ではないか。つまり、自己完成の路ではないか。

「自力で自己完成を求めていく、高きを目指して登っていく。そういう方向でせうやろうという、そのこと自体が本当にそれでいいのか。それが正しい路なのか」と、問うておられる。結論的に言いますと、そうではないというわけだけでも。

●三つの岐路

少し飛ばして、238頁の所へいきます。そこに出てきます。

《三つの岐路》

一体、人間が路を歩むということに如何なる意味があり得るか。その一は己れの欲するところのものを目標または相手として歩くことであろう。その二は神（広義の）を第三者として、すなわち達せらるべき理想の対象として求めつつ歩むことであろう。その三は神（厳密な意味の）を第二人称すなわち対話者たる相手として歩むことである。人生のすべての道はこの三つの中いずれかに属すると一応は考えられる。

この三つだと言って、第一も第二も実はダメなんだと言って、第三の路を示す。カントが



目指しているのもこの第三の路なんですが——あるいは第二の路かも知れないね——239頁の終りの所から見てみますと、

以上の如く第一、第二の路を考つるとき、後者は

これは理想主義的、浪漫主義的に達する、自分で措定した最高なるものへ到達しようとする路ということで、それは

前者に比して著しく高尚にして道德的なるにもかかわらず、要するに、自己追求であり、自己肯定であり、自己完成の方向を辿る路である。

だからどうも、第二の路へ入れておられるようです、カントやらダンテの、こういう高き山に登ろうとして絶望するというのは。それは、

要するに、自己追求であり、自己肯定であり、自己完成の方向を辿る路である。

それがいかに没我的に見えてもなお且つ主我的な路なのである。但しこの二巨人にはそれを乗り越えた領域もあつたが。

その「二巨人」というのは、カントとゲーテを今度はあげておられる。

人間の感性も智性も実践理性も、自己発展、自己充実の方向をとるときは、結局真の人格主義に立つことは出来ないのである。人間の全我が根本的に失われているものであるとの自覚は、これらの途上においては実は発見されないのである。

故に道德的努力と云うものは、それ自身においては、理念的なものまたは神性への、謂わば「知らざる神」

これは使徒行伝に出てくる言葉です。パウロはアテネの都に行つて、いろんな偶像がいて、その中一つの「知られざる神」あるいは「知らざる神」という祭壇があつたという。

への暗中模索たるに止まり、その努力が肯定される限り、救を自然的連続の方向に要望するものであり、

つまり、人間が人間のままでそのまま努力して、ついに到達できるといふ、自分が肯定されていて、その延長線上に理想なるもの、至高善を手に入れることができるという、そういう方向なんです。いわば、

救を自然的連続の方向に要望するものであり、プラトンのイデアへの求めとなるかアリストテレス的樂觀主義に甘んずるか又は現世的諦念主義に墮するかである。

故にこれらの路においては、それが感情的であろうと、実践理性的であろうと、すべてはパウロの所謂「肉」（サルクス）であつて、性来の人間における最も精神的なる要求も、ついにこの「肉」なる極印を捺おされているのである。されば壮麗なるギリシヤ主義も、崇高なる独逸理想主義も、ついにこの「肉」の土壤に生え出でたる美しくも枯れゆく花の悲しみをまぬがれ得ないのである。

と、非常に厳しくここで書かれています。結局、本当の宗教の路は、先ず徹底的に自分の存在が神の前に立ち得ないということを自覚して、それから恩寵によつて神に救われてい



くという路だということを説かれる。

私はここで敢えて少し申し上げたいんですけれども、このダンテが絶望しますね。ダンテは必死になって登って行こうとしたけれども、まず絶望します。そして結局は、地獄の姿を見せられて、

「ああ、そこに自分の姿がある。これはもう自分は神さまの義の前にはとても立ち得ない。神の前に立ち得ない者だ」

と。神さまというのは、どこかに想像する神ではない。描き出す神ではない。現にいます神である。私に立ち向かっている神で、しかも審きの神である。峻厳なる神の律法、道德の前に自分はすくむばかりである。審き主として自覚して、そこで十字架をひっかぶって、私に代わって審かれてくださる救主すくいぬしキリスト。それにすがって、恵みの力で天に至る、天の世界へと上げていただく。これはもっぱら神の側からの掴つかみかかりであり、そして神さまに抱かれて天にのぼってくださるという、全く他力たうりきの路なんです。それまでは自力じりきの路です。先生は自力の路を徹底的に否定して、他力の路へという、それをここでずっと展開していかれるんです。

私は——今日は若い方もたくさんおられます——そこで敢えて言いたいです。この他力の路というのは、これは自力の路で本当に格闘した人が初めてこの他力の路の有り難さがわかる。始めから

「自力の路はダメだよ」

と言つて捨て置いて、安易に「主さま、主さま」とただすがつているというのは、もやしもやしの信仰になってしまふ。日照りがきたら、たちまち萎なえてしまふ。いっぺん自力の路で徹底的に苦しんで、

「自分はとてもダメだ。煮ても焼いても勝手にせよ。地獄必定の身だ」

ということを本当に自覚した人、それが初めて他力の有り難さ、恵みの有り難さがしみじみとわかるんです。だから、若い人は——いや、いきなり福音の路を行って、それでスーッと行かれてもいいですよ——けれども、

「いや、私はそんな安易に福音には飛びつきたくない。私のプライドが許さない」

という人は、そのプライドに賭けて自力の路を命懸けでやってほしい。中途半端が一番いかん。命懸けでやって、ぶっ倒れたら、その時に光が射してきますから。だから、神さまは人を導くのに、いっぺん自力の路を徹底的に行かして、そこでもうコテンパンにやつつけられて敗北して、気がついてみたら、救いの手が差し延べられていたと。

「あなた、気がついたか。それでいいんだよ。あなたを自力の路で苦しめたのは私だったよ」

と。そういうことで、決して無駄ではありませんから。苦しむなら、真剣に苦しんでいく。その間に陽が照つていきますから。その時はもう獣もおりません。路を登って行けば獣がい



でも、空中戦で行くんですから。

ですから、私は、やっぱり若い方々は、自分に忠実に、自分の欲求に忠実に、本当に真剣に努力して下さって、それで破れた時に本当の別の路が差し出されている。それは、

「もうあなたは充分、苦しんだから、もういいよ。直ぐに飛びつきなさい、福音の路に」

と。いきなり、福音に飛びついた人は、一見、御言を受けて喜んでいますが、日照りがきたら、たちまち萎なえてしまうという、「種まきの譬話たとばなし」がありますね。根がないので、いろんな試煉がやってきたら、干上がって参ってしまふという。

あるいは、経済的な一つのプロポーザル「proposal」企画、提案」があります。

「どうです、うちの会社へ来ませんか？ 巨万の富が築けますよ。その代り、『神様』なんて言わないでください。経済に『神様』なんていないんですから」

なんて言って、経済オンリーでぐいぐい引張って、いつのまにか自分の魂は売られてしまつて、富を手に入れた時にはもう自分はそのにいない。安易に福音に飛びついた人はまた安易に捨ててしまう。離れます。けれども、命懸けで倒れたのちに福音の光によって抱かれた人は、もう先に捨ててしまったのだから、もう一本路しかない。

ですから、若い時にいろんな苦勞をなさることは、道徳的な苦勞であれ、経済的な苦勞であれ、その他、病を得て人生が人より遅れる苦勞であれ、何であれ、本当のお方にその後に出会うなら、全部元を取れますからね、倍にして返してもらえます。だから決して、

「私は不幸な人間だ。あいつはどんどん出世して行つたのに、私はなんだ今は、まだまだ道なかばではないか」

なんて、そういう比較はしないこと。それこそ神さまを相手にして、

「神さまはよほど私を見込んで下さったゆえに、私をこんなに回り道をさせて、苦しめられていらつしやるんだな。私は愛されているんだ」

と、そう思っていたらいいわけなんです。

もう一度、237頁に戻っていただきますと、

《我々はかくてダンテの登山不可能において、自律的徳の途——我々が儒教的教育のもとに学んで来た途——自己完成の途の不可能なるを示された。我々はしかし、もう少しく立ち入った批判を試みなくてはならぬ。すなわち、山に登ろうとすること、すなわち神の完きにまで到らんとする努力そのものが可能なりや不可能なりやの問題よりむしろ、かくの如き路の辿り方そのものが一体義しきや否やの問題である。すなわち所謂徳の路を辿ることの可否の問題である。》

そもそも、そうやって山に登ろうとすること、神の全きまで至らんとする努力そのもの、そういうやり方そのものがおかしかったのではないか。可能不可能ではない。その登り方そのもの、辿り方そのものが神さまの目に正しいのかどうか。いわゆる徳の路を辿ること



との可否の問題である。そして、先生は「否」という答えが出るんだけど、私はあえて頭で否の答えを出さないで、生活の中で格闘して否の答えを出してほしいと、そう言いたいんです。それから、

《三つの岐路》

一体、人間が路を歩むということに如何なる意味があり得るか。
三つの路があると。

…第一の路、すなわち己れの欲するところのものを目当または、相手として歩く活き方はおよそ物質主義、実利主義、幸福主義、享楽主義、果ては虚無主義というような大方の現実主義的立場であって、実は最も多くの人々の心を取りこにしているものである。

本当に大多数の人はこれなんです。宗教を求めても、これを満たしてくれる宗教を求め。「宗教」といえば高尚に聞こえますけれども、結局その宗教を手段にしてこれを手に入れたいんです、物質、実利、幸福、享楽を。しかし、それは結局は本当のところに行かないよ、ということ。それから次に、第二の路、239頁の4行目。

さて次に第二の路、すなわち神（広義の）を第三者とし、達せられるべき理想の対象として求めつつ歩む活き方は、広義の理想主義的または浪漫主義的な立場である。ここでは神は究極のところ理念または憧憬の対象として把握されているわけである。一般道徳修養の路もこの路のうちにあると云えるけれども、それはまたしばしば第一の路に通じている。

いわゆるそれは、神さまを対象的に考える。「一体、神は在るか無いか」とか、「いや、神はなければならぬ」とか。そういうように、自分と対面するお方ではなくて、いわば自分の外に在って、自分がそれを論じることのできる対象として、客体として考えている、そういう「イデア」（観念）としての神という捉え方なんです。

個人の自覚を「コギト、エルゴ、スム」（我思う、故に我在り）と云う命題に始めたデカルト以後、然りカントを中心とする独逸観念論的人生観は、その哲人、詩人、宗教家たるを問わず、要するにこの第二の範疇を出ていないのである。
なかなか手厳しいですね。

「ファウスト」の根本思想は「上に向って努力精進する者は救われる」と云うのであり、あるいは、「人間は努力精進するかぎり過つ者である。だから、その過ちは許される」という非常に楽天主義といえますか。

その救済観念たるや著しく汎神論的であり、
つまり人格神という観念ではなくて、自然の中にどこにもいらつしやる神という、人格神という一点にしばられていないということでしょう。

汎神論的であり、また「善き人は暗き衝動の中にあるとも、必ずや正しき道を識る」



と云う樂觀主義を基調としている。カントとゲーテとはカントは哲学的、ゲーテは芸術的・感性的ということですね。

実に目ざましき大きな対立であるにもかかわらず、前者（カント）は哲人として自律的理想主義を以て、後者（ゲーテ）は詩人として汎神論的現実主義（前述の現実主義とは趣きを異にしている）を以て、近代の大きな人本主義的潮流の二源流をなしたと云って過言でなかつ。

この若い時の先生は、非常にゲーテに対しては手厳しいけれども、晩年の先生は全然違いますよね。

「神・自然・我というものを全部、ゲーテはパツと受けとつて、彼は本当にキリストのことをよくわかつているよ」

という、非常にゲーテを肯定的に大きな角度から捉えられておられるけれども、若い時の先生は——藤井先生は

「ゲーテは警戒しろ。あれは女性がたぐさんおるからダメだ」

と言ったとか（笑）——非常に道徳的観念の中からゲーテを見ておられたように私には思える。だから、ここにこういうことを書かれています。要は、この二つは美しいように見えても結局は——さつき先取りして申しましたように——自己追求、自己完成だと。己を神の如くする。

もう一つの第三の路は、自分がどん底に佇たたずみなさいと。神さまが引き上げて、キリストの形を成らしてください。神の形があなたの中に成る。神さまがあなたを仕立てあげて、神さまと同質のものに築き上げてくださる。どこまでも自分は神の僕しもべである。神に愛される子供なんです。

片一方は、神さまを理想の姿において追い求める。そこへ自分が到達して神さまと対等に取引もできるような独立宣言なんです。それは全然違うんです。蛇が誘ったのがそれなんです。

「あのリンゴの木の実を食べてごらん。神の如くなる。賢くなる。神の如くなりたいたら。今はあなたは何も知らぬバカものだから、神さまが「こうせい」と言えば「はい」と、「ああせえ」と言えば「はい」と、「あっちへ行け」「はい」と。それであなたはいいかね。それで人間の自尊心、独立心はどこにあるのか。あの実を食べてごらん。死ぬどころか、賢くなって、神の如くなれる。どうだ、やってみないか」

と。それでパクパクと食べたなら、人間の姿が分った。「ああ恥ずかしい姿だった」といって木の葉で前を被った。神さまは毛皮を持ってきて包んでくださった、というのが創世記に出ています。

だから、自分が神になるのか、神さまが主になって、神の姿に化していただくのか。大



違ひなんです。神の姿に化していただいた人はキリストの姿、どこまでも平伏しの姿、愛の姿です。神さまのコピーになるのですから、いいんですけれども。

自ら神に成ったものはサタンですね。墮落した天使がそうやって神さまと張り合うわけです。己を肯定する。これは決して神が喜び給うところではない。そういうことで、これは否定されるべき路になってしまう。

アウグスティヌスにおいても、そういった面もちよつとあるというようなことが次に出てきます。ちよつとここは駆け足にいたします。最後に、241頁の終りの所に、

《大把^{づか}みにはあるが、ス^コラの神学も、中世的神秘主義も、カトリック的信仰も、近くは相対的歴史主義も、浪漫主義的体験宗教も、心理的敬虔主義も、最近の人間学的思潮も聖書が語るところの神に対する正しき神観を有^もつとは考えられない。かくしてダンテ彼自身が山に登ろうとしたとき、実は近代的理想主義の胚種を有^もっていたと言わねばならない。しかもまた彼が煉獄浄罪山に登るに伴^りれて

地獄・煉獄・天国ですね。そういうものを登るにつれて、意志の完成を得たあの考え方には、自律の思想と功績観念が肯定されているわけで、彼から信仰の本質的なものを学^ぶわけにはゆかない。》

ダンテに対しても厳しいですね。否定的です。晩年の先生はどうですか、ゲーテとダンテは全然、つかまえ方が違ってきます。自律の路では、天国篇なんかきつと出てこないでしょうね。私はダンテの『神曲』はまだ読んでいませんので、先生が

「ダンテを読み、ダンテを読み」

と仰るのにかかわらず、私はまだ読んでおりませんので、これからの課題にいたしますけれども、少なくとも晩年に先生から聞いたダンテ像と、ここで33歳の先生がダンテやゲーテを断罪しているのとはまるで違うなという印象を持ちます。

● 第三の路

さて次に、「第三の路」に行きます。

《第三の路》

然^{しか}らば第三の路、すなわち神を相手として歩む生き方とはどういうものか。そこには如何なる問題と解決と更に課題が存するのであるか。

神はよく全智全能であると言われる。しかし神を全智全能として信ずるとき、そこには神を対象的に信じようとする側面が多分にありはしないか。むしろ我々が心の底から「神」と呼ぶとき、そこに把^{つか}まれているものは、最も深き意味における人格的存在ではないか。そのとき、我々は「神」を「彼」と云う第三人称を以て呼ぶのではなく「汝」と云う対称を以てすべく余儀なくされるのを感じはせぬか。それこそ神の人格の絶対性が、我々の側からの対象化をゆるさぬ深みを以て迫って来ることではないか。



実に神の人格は神の實在をして實在たらしめる本質であって、神は理智的に認識されようとしていたり、意欲的に信じられようとしていたり、情意的に感ぜられようとするのみでは、真の神からは遠き神的なるものであるにすぎなくなる。

何か山の中に入って行くと神さまが感じられるとか、太陽の光を浴びて神さまを感じられるとか、だから神さまが来ているとか、そういう非常に自分を鮮明にして、自分の働き——知的な働き、意志的な働き、あるいは感情的な働き——それを抛り所にして、

「神はきつとこんな方だ」

というふう人間に人間の側から見ている神さま、それはまだ幻かも知れない。「つかまえた」と思っても、それは自分がそう思っているだけなので、人間の主観がとらえた神、それは本当の神ではない。

では、本当の神さまはどうして捉えられるかということになりますが、それは結論を先に言うと、神さまによって捕えられた人が初めて「神さま」と言える。神の方から人間を捕まえ、あるいは圧倒して、そこにぶつ倒された時に初めて、

「ああ、主キマイー」

というのが出てくる。それは一対一の関係です。しかも一対一の関係というのは——偉そうにいますけれども——本当に一対一で神さまの前に立てる人間は一人もいないではないか、ということになっています。

人間の文化はたかが此の如き神を拝するに過ぎない。然るに深き人格の神は実にとは正反対に、我々個人を「汝」と呼びて顧み給つのである。

向こうから呼んでくださる神。一人ひとりに呼びかけてくださる神。呼ばれて初めて我を自覚するという関係です。この神に対してはもはや、「汝」なんて偉そうに呼べません。「あなたさま」と呼び奉る他に、我々のあるべき場所はない。

この神に対しては最早「汝」と呼びまつる外に我々の在るべき場所がないのである。

活ける真の神に会わんとする者は、自らを神に対して「汝」と「我」との場所につまり、一対一の場所に、

置かねばならない。そのとき神は主体的に把握され自己はかえって神の客体として自覚されるのである。

神さまが主役であって、私は神から呼ばれる、神の相手とされる、そういう客体、オブジェクトである。神がサブジェクトで、自分はオブジェクトである。そういうふう自覚する。

かくの如き信仰の現実断じて主観ではない。それが主観的に墮落するときには即ち神との関係が此の如き人格的關係にないときであって、それは主観的な心理主義、体験主義、神秘主義たらざるを得ぬであろう。主体的なる神認識とは、神在しますが故に我が在ると云う立場であり、神の啓示が神自らの人格的實在を示すが故に始めて私の自覚が在ると云う絶対的自覚の立場である。



これは啓示だと。神さまの方から示してくださいと初めて、「はい」と言えるので、神さまが示し給うことなくして、神さまを捕まえて神を見たとか言えない。モーセの体験がそうでしょ。柴の木が燃えている。しかし、燃え尽きない。不思議だなと思つて近づいて行つたら、神さまの方から声があつた。

「聖なる場所であるから、あなたの靴を脱げ！」

「はい、あなたはどなたですか？」

「我は在りて有るものなり」

と、神さまの方から自分の名前を知らせ、そしてご自分を現された。モーセは畏れ戦おそおのいて平伏した。それから

「あなたを遣わす。エジプトに行つて私の民を救いだせ！」

と。そういうふうには、神さまの方から現れてきて、そして人間を捕まえて、ひきずりまわす。その神が真の神であつて、神に捕まえられてあるが故に神あり。神が私をひきまわしておられるから神あり。神が私のうちに内住してくださっているから神ありという、そういう告白でなければ、哲学的に「神が有るとか、神が無いとか」でなくて、それはどっちだっていいことだ、

「あつしには関わりのないことでござんす」「テレビドラマ「木枯し紋次郎」の台詞」

という世界なんです。そういうことなんです。それを「絶対的自覚の立場」と言っている。

我れが神を知るのではなく、「我は神に知られたり」と云うパウロ的な自覚である。根拠が全く対者なる神にある。我れが任意に信ずるのではなく、信の源は神の霊的人格の實在にある。これほど現実な事実は何処にもない。これ実に人間の在るべき唯一の立場であり真の現実である。社会倫理の根拠もこの立場に置かれていなければならぬ。世界のすべての文化的問題の根源は実にこの神対個人の場に存する！ カントの人格主義は著しく理念的であるが、信仰による人格の概念は期くの如く実存的である。それが如何に深い倫理であるかは、神の霊的人格の實在の弁証法的機構の分析により明かとなるであらう。

難しい言葉が出てきますね。「神の霊的人格の實在」、ここまではいいんです。「弁証法的機構」、これがちょっとわからない。おそらく、神さまは御子キリストをつかわして、その方においてご自分を現し、その御子がまた神の高みにもつて行かれたということを指しているんだらうと思いますけれども、私がこの言葉で思い出したのは、先生が後年にベルジャエフ（ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ベルジャーエフ（1874～1948）、ウクライナ生まれのロシアの哲学者）の翻訳をされました。ベルジャエフの『神と人間の実存的弁証法』という本の翻訳です。先生はこのベルジャエフに取り組んでいる時に、口を開けば

「ベルジャエフは素晴らしいよ」

と盛んに言っておられた。のめりこんでおられました。そういう時がありました。白水社



から出ています（『ベルジャエフ著作集第6巻『神と人間の実存的弁証法』1960/10刊）。

● 罪びとの首

その次、このへんから本論になります。

《罪びとの首》

さてあらゆる限定を絶する人格の神と、いとも小さき我との関係において当然起るべき問題がある。それは如何にして我は神を相手とし得るかの問題である。そして何故にかかる問題が起るか、換言せば何故に「汝」と「我」との間には自然的関係が成り立し能わぬか、と問われねばならない。

神さまとの一対一の関係で、神から呼びかけられ、それに応えたりする。その関係が、気づいたらすぐストレートに成り立てばいいものが、成り立たない。神の前に立つということは、自分の醜さや自分の罪、それを嫌というほど知らされる。さきほどダンテが地獄の姿を見せられて、それらの姿の中に自分を見たように、こんな自分は聖なる神の前に立たないという絶望的なことを示されるということなんです。

人は聖なる神の前に立つとき、始めて本当の自己の姿を発見せしめられるのである。実に人が真の自己発見をなし得る唯一の路は、この神を相手とすべきこの第三の路においてである。

まず生ける神、人格の神をあえて相手とせよ！ しかせば我はわが本体の如何なるものたるかを知るであろう。それはすなわち、私のうちに罪があると云うよりはむしろ、私は罪であると云う全体的体験であり、超主観の自覚である。

「私のうちに罪がある。私は罪を犯しました」と、そういうレベルはまだいいんです。

「私そのものが罪だ。私という存在そのものが罪だ」

と。それはさつき、人間は意志的存在だと言いました。神とは善意志だと言いました。ところが、先生が言わんとすることは、その意志的存在が神に反逆するという姿の存在ではないかと。己を立てる。人間が人間であるかぎり、己を立てたい、誇りたいわけです。神の如くなりたい。そこに人間の姿そのものが罪と自覚されたわけです。

神さまを無条件に肯定する。神さまの前に無条件に自分を捨ててかかる。空っぽにする。無者の姿に徹する。それができたのはキリストだけです。

「我々は、存在そのものが神さまの前に立ち得ない、罪そのものである」という自覚なんです。

私は罪であると言った全体的体験であり、超主観の自覚である。実に人は何人も神の前に置かれているのに、それを知らず、むしろその場より逃避せんとする。しかし神の前を遁れて誰か己れを隠し得よう。実に哀れむべきは、人の心の姿である。道德の問題が人たることの問題である限り、すなわち人格の問題である限り、これは実に神との



真剣なる対立においてしか考えられぬものなるを知れ。この神を相手とせんとすることとは、否、相手とすべく追いつめられたる人の立場と云うものは、道德の新しい認識と、自己の新しい発見と、罪とは何ぞやの解答と、信仰とは何ぞやの確認を余儀なくされるほかにはずである。然るに人は実に「自我」であり「罪」であるが故に、神を無視せんとし、自己を欺瞞せんとする。人生の岐路これより大なるはない。

ああ汝聖なる神の前に、そも私が何であるか。私の人格と云う如きものが汝の人格の前に何ものであるうか。私の意志が何であるか。そんなものは一顧の価値もない。私はこの眼を汝にそそぐことも出来ぬ罪のかたまりでしかない。私は汝の求め給う霊ではなく「肉」である。パウロが嘆き、アウグスティヌスが泣き、ルターが苦しんだように、この私の罪をどうし得るか。神、汝の前に完全にさらされ審かれている私に道德の人格のと云う口があるうか。

藤井先生も、そういう深刻な体験をなさったということ、その文章が終りの3行目から出てきます。

「然るにそのうち或る時が来た。さうして今まで道德、道德と叫んでいた自分の口が、急に石のように塞がってしまった。私は肅然として黙した。それは恐るべきものを見いだしたからであった。何かしら真赤な、焼け落ちる宇宙の炎とでも言おうか、恐ろしいものが自分の前に立ちはだかっていた。私は逃げようとした。しかし足が動かなかった。恐ろしいものは容赦なく迫って来た。私は悲鳴を挙げながら、遂にそれに吞まれてしまった。

それは何であったか。それこそは道德であった。律法であった。今まで私は断えず律法の影を追いながら、実はまだその正体を見たことがなかったのである。見えずに、あたかも容易にそれを捉へ得るかのやうに、徒らに追い求めたのである。然るに律法が一たび立ち止り、振返って私に迫りくるのを見れば、これはまた何という恐ろしさであろう。有無を言わず私を捉えて、山が崩れかかるように私の上に落ちかかるではないか。

律法のまえに私は驚愕し戦慄した。それは私の道德発見であると同時に、また自己発見であった。ほんとうの道德のまえに立つとき、自分の姿が何と憐れなものであるかを私は見た。実は人知れず私は哀哭した。夕ごとに野に出て、薄闇の中に立ちくらしながら、幾度び熱涙をそそいだか。ああ道德は私を脅かした、私をえぐった。さうして遂に私を押し潰した。私は律法に殺されてしまった。その時以未私の口は黙したのである。私はまた道德を呼ぶることをやめて、自分を投げ出したのである。もはや私は喧しい道德家ではなくなった。然らば今は何か。曰く罪人の首！」

深刻なる体験ですね。藤井先生というのは非常に意志的なお方であったように思います。凜とした道德律に従うというお方であったと思います。非常に道德に厳しかったお方のよ



うでした。その「道德、道德」と言っておられた方が突然黙ってしまわれた。それは道德の正体、律法の正体を見てしまったから。向こうの方から迫ってきて、自分を押しつぶして殺してしまった。そこで埋められてしまった。残された自分は罪びとの首かしらという自覚だけだった。

……活ける神の聖にして厳かなる律法として臨んだのである。すなわち先生は神の要求の峻厳なるを深く実感せしめられ、そのために倒れたのである。神の律法に死し、神の審判を決定的に感ぜしめられたからこそ、「罪びとの首」なるごん底の自覚と告白をされたのである。想うてここに至るときわが胸の熱くなるを如何せん。或る別な声
が「汝はその人なり」と告げ、

「藤井先生だけではないよ、あなたもそうなんだよ」と。「汝はその人なり」とは、ダビデがナタンによって「汝はその人なり」と言われた。それが引いてあります。

わが哀なる呻きがこれに応えて「然り、汝我を拾もたげて投げ棄て給えり」と言つ。

これも藤井先生の『羔の婚姻』の始めの方の言葉です。奥様を亡くされて嘆いておられた時のこと。「汝我を拾もたげて投げ棄て給えり」と、悲歎のどん底に打ちつけた、暗闇の中だったという、寂しさの極みだったという。あんなに素晴らしい奥様を、まさに神の僕のような人をなぜあなたはお見棄てになったのかと。それは私を捨てられたんだといって、この言葉を引かれて、「汝我を拾もたげて投げ棄て給えり」と。

律法は私を拾もたげるはずであった。生かすはずであった。然るに私は投げ棄てられた、殺された。神抜きのの道德は木刀のようなものだ。それは私を殺さない。木刀の試合は遊戯に過ぎない。真剣まけんを執とつて神と試合を。そのとき神の真剣が私の頭上ひらめに閃く。私はその場に平伏ひれふすの外はない。》

● キリストの十字架

そこで十字架が出てくるんです。

《キリストの十字架》

神、道德、信仰、十字架、復活、それらの言が生活を飾っているうちは未だしである。しかしあるとき——それは殆ど常に神の痛き鞭と共に——動きのとれぬところに追いつめられる。そのときに神の我を打ち給たまいし同じ手が、我を抱き給たまつのである。

審きの神が実は抱きの神である。この抱きの愛を本当に徹底的に知らしめるために、無条件で受けとることができるように、神は徹底的に一たび追いつめ給たまうたのである。無力に徹せしめ給たまうたのである。一切の誇りを打ち砕かれたのである。そのとき自分は初めてさまの愛の御手に抱かれて安らう自分を発見する。赤子のような姿です。

そのときに神の我を打ち給たまいし同じ手が我を抱き給たまつのである。それはいかなる意味であろう。言つまでもなく、十字架のキリストによる救である。この外に道德と罪の



問題の解決の路は絶対にはないのである。斯くの如く神を相手の第二の路を歩もうとする限り、どうしてもぶつからねばならないのは、神の要求たる道徳であり(それは神の聖にして義なる人格の現われである)、己れを救われ難き、失われたる罪びとなりと自覚せしめられることである。しかもそのとき神の救わんとしてさし伸べ給う聖手を拒むならば、救は最早のぞみ難きものとなる。私はここに十字架の意味を詳述しようとは思わない、しかし骨子だけは告げなければならぬ。

と言って、この十字架がなぜ神の義であるのか、なぜ十字架が愛であるのか、それを簡潔に述べておられます。辿ってみます。

神が神たらんがためには罪を処分しなければならなかったのであった——その義の故に。また神が神たらんためには何とかしてこれを赦したのであった——その愛の故に。人格の交渉はいのちの触れ合いである。神の魂をこめて創り給った人間が今亡びようとする。神は人のいのちを救わんとすに自らいのちを棄てよと決意された。神の分身、ロゴスの受肉、キリスト・イエスはここに現実なる罪を現実におのが身に引き受け、これを贖うべく十字架についた。これが事実でないならば、その外のすべては夢だ。これは実に神の聖意であり、神の本願である。弁証法神学者らの熱烈に説く原歴史的(urgeschichtlich)な事実である。イエスが十字架上で「わが神、わが神、何ぞ我を棄てたましいや」と叫ばれたとき、それは実に神の義への最大の逆説的弁護であった。神の義はこれにより立ち、人類の罪は彼において審かれた。罪の赦しはこうして人類に臨んだ。人はしかし十字架の上のもう一つの言を忘れてはならない、「父よ、彼らを赦し給え、そは彼らそのなすところを知らざればなり」。彼は実に神の心を心として執り成し給った。これは人の祈りではない。神自らの裂かれたる愛の心である。かくて神は自ら罪を滅ぼし、罪に勝ち給った。神の勝利は何であったか、それはキリスト復活の事実であった。十字架のキリストにおいて神の義は立ち、罪は赦された。復活のキリストにおいて更に義は人に与えられようとする。この二重の事実こそは恩恵であり、愛である。罪は赦され、キリストの義が衣せられる。この信仰により罪人は同時に義人である。パウロは此の如き神のわざを告白して曰く、

「神は忍耐をもて過ぎ来し方の罪を見遁し給いしが、己の義を顕わさんとて、キリストを立てその血によりて信仰なだめそなえものによれる宥の供物となし給えり。これ今おのれの義を顕わして自ら義たらんため、またイエスを信する者を義とし給わんためなり」(ロマ3・25〜26)

ここにおいてか我らは知る。神の前に我らが立つとき、我らは罪なる我を見ると時に我々の立つところは十字架の下であることを。十字架は我々にとり絶対的要求であると同時に、否それよりよききにそれより深く、神の与えんとし給う恩恵であることを。しかしながら、我らは神の恩恵がいかに神の究極の意志であるとしても、恩恵が神を



限定する危険に陥ってはならない。

以下に書かれていますことは、神さまは神さまなる故に尊いのであって、「人を救うから神は尊い」とか、「恵みだから神は素晴らしい」とか、そんなふうにくつちの方から神を限定してはいかないということが出てくる。これは非常に由々しきことが出てくる。つまり、我々罪人には、恩恵を求める資格は毫もないからである。それ故に神が神たらんことが、人類の救済と相容れざることあらんか、即ち我々は滅びつつ神の神たり給わんことを祈るべきである。

もしも神さまが本当に神であるためには、

「もう人類は救えんわ。どうしても、人類を救ったら神が神でなくなるといいうなら、救わんで結構です。やっぱり神はごきまで神でいてください」

と、そういう角度でなければダメだということが言われている。非常にちよつと非人情的な角度です。つまり、

「神は神なるが故に絶対、神であつてほしい。人を救うために神が神でなくなるなら、それはもう結構でございます」

と、そのぐらいに、神を神なるが故に義とし奉る、そういう角度が人間に大事だという、非常に高次の倫理的な信仰がここにうたわれている。

それ故に先生は言われた、「人が救われるか否かは勿論大なる問題たるに相違ない。しかしながら神が神たるか否かは更に遙かに大なる問題である。これまことに一切の問題中の第一問題である。人は已むを得ずば救われずともよい。

どうしてもあかんのだったら、救われんでもよろしいと。

しかし神は永遠に神でなければならぬ。

これが神一切の立場だという。

斯くて我々は神を相手の第三の路において、神一切の立場に立つたわけである。神の意志とわざとの一切を義とし奉りつつ歩く路。神に対して「然り」と応えるこの路は自己に対して「否」と置する路である。神をこのように「まこと」とすることがすなわち神に信頼するということである。「たとい彼れ我れを殺し給うとも」(ヨブ13・15) 我は神を義とせざるを得ず、神のとりはからいは最善である。》

ここでちよつと私は註釈を付け加えたい。確かにこの一番最後に出てきていることは、人の側から見たらギョツとするようなことでしょう。

「もしも、どうしても救を受けるのが難しければ、もう救は結構でございます。神さま、あなたはごきまで神さまであつてくださら」

これは確かに理性的要求かも知れません。あるいは哲学的に、「神は神であるためには」という要求かも知れません。けれども、有り難いことに、我々の神さまはそういう冷たい神さまではなかった。神さまはいかにその狭間で苦しまれたか。つまり、神の義の要求と、



人を滅びから救いたいという愛の要求、その二つの板挟みでいかに苦しめられたか。それが正に十字架なんです。ゲッセマネのあのキリストの苦しみです。なぜ、キリストがゲッセマネであんなに苦しめられたか。これは

「神が神たらんとする故に、もし人類が救われなくても、それでいい」と言うなら、キリストは楽なんです。

「私はあなたの御許に参ります」

と言って、さっさと天に帰ってしまえばよかった。キリストはそれだけの資格があるんです。

「あれだけ三年半、命懸けで伝道しました。神の言を伝えました。あなたの愛をくまなく現しました。死人を甦らせ、罪を赦し、義の道を語り、すべてのことをやりました。それでもこつちを向かないのは、人間の自業自得です。あれは滅ぼして結構ですよ。あなたは神であってください。私もあなたと一緒に神でありますから。人間よ、サヨナラ」

と言って天に昇ったら、それで終わりなんです。でも、それをキリストはなさらなかった。そして、

「父よ、本当に私がこの十字架の苦杯を飲まねばならないのですか。あなたは誠に全知全能のお方です。他に道がないんですか。どうしてもないならば、私は御意に従います」

と。ですから、ここに仮定的な問題として藤井先生が、

「神が神たらんためには、どうしても人間を捨てなければならなかったら、それでも結構です。神は神であってください。」

と、これはロマンチックにはそんなことが言えますけれども、我々が人間として

「救われたい」

という願いを持っている。そして、神さまは

「救いたい」

という本願を持っておられる。そういう現実においては、この問題は私はただけでないですね。理念的にはわかりますよ。けれども、それならば、神さまはなぜあんなに十字架で苦しみ給うたか。十字架は神さまご自身の苦しみなんです。神さまご自身が自分の御子キリストをつかわして、受肉させて、人の姿で人が聞ける言葉で語られた。それまでの神さまは、インスピレーションでしか感じ取れない神さまというのは、人間には無理ですよ。これはよほどの感性の豊かな、霊性の豊かな人でなければ、神さまの御声を直接に聞くとか、霊感を感じて神に従うとか、これは人間の難さを知るものです。我々が生身の人間である、そして神の御声を聞くには、生身の人間というのはやっぱり神さまが現れてくれなければしょうがない。



それがナザレのイエスだったんです。だから、ナザレのイエスという方は、我々と同じ生身の人間でありながら、もうひとつ神の本性を本当に現しておられる。神さまが内住して、我々の意志によらないという、本当に神さまがそこに隠れて宿っておられる。それでいて、人間の言葉を語り、人間の感性をもち、涙をもち、愛をもつて、我々と交わってください、抱いてくださるお方。しかも、神の峻厳なる義の欲求を自ら身体をもつて受けとってください、そういうお方です。

それがあの十字架で引き裂かれてしまったわけです。砕かれてしまった。そこまでして神が神でありつつ我々を救うという、この相容れないものを一つにしてくださいのが十字架なんです。その厳かさとお神さまの苦しみから神さまを救い給うたキリストの素晴らしさ。だから、私は「主さま！キリストさま！」と呼ぶ。キリストさまの背後に神さまはおられますけれども、私たちはダイレクトに神さまと直言なんかしない。ダイレクトに直言したらもう、

「我は滅びるばかりなり」

という。そうでしょ。それが、キリストが現われてくださって、神さまの側からは、

「もう私のすべてをあなたの中にやる」

と仰るお方であり、キリストさまは私に対して、

「あなたを赦す。あなたのすべてを荷っている。神さまの前に私とあなたは一つになって対するのだから、何も心配はいらない。私の中の善、私の中の義、すべてをあなたにやるよ。生命をやるよ。私は空っぽでもいいんだ。神さまの前に空っぽ、人の前にも空っぽ。流れてきたものは全部流してしまう。私はいつも空っぽ。もう即無限無量。それはあなたのためだ。」

と。それが具体的には十字架という赦しになって現れた。復活という事実をもつて赦しを実証された。そして、昇天して聖霊として帰ってこられた。これが生命なんです、私たちの聖霊の生命、これがキリストの分身です。

そこで、249頁の1行目からもう一度見ていただきたい。

《…かくて神は自ら罪を滅ぼし、罪に勝ち給うた。神の勝利は何であったか、それはキリスト復活の事実であった。》

キリストをあの栄光の姿で現した。神さまの側からしたら、十字架でもう完全に罪は贖われしまっている。それでもう終わったんです。終わったけれども、そのことを世の人にハッキリと宣言するために、そしてキリストご自身のあの義の生命は死につばなしでは済まないんです。霊体となって、高次の生命となって、受肉のキリストが砕かれて今度は栄光の霊なるキリストとして、しかも体をまとして、霊体をまとして、現れざるを得ない。これは必然でありました。だから、その栄光の姿で現れざるを得ないというのがキリストの本質から出たことであると同時に、神さまの人間に向かったの、



「あなたたちの罪は徹底的にここで審かれ、義とされたよ」という、義の宣言なんです。ローマ書にちゃんと書いてあります。

「復活せしめられて義を現し給うた。義を宣言された」

と。だから、これはキリストにおいては生命の勝利なんです。ひとたび肉の生命は十字架で死せられ、陰府よみに突き落とされ、どん底を味わったけれども、ああいう栄光の姿で現れて勝利を宣言された。

「私は死んでも死なない生命だ。私を信ずる者は死すとも生きる」

と、マルタに対して仰ったことを実証されたのがこの復活という事実です。それはキリストにおいては現実なんです。しかし、

「私と一体なんの関わりあらんや」

というものがそこに出てくるはずでしょ。キリストの勝利はそこで宣言された。それは人間からすれば、

「罪が赦された。あなたは神の前に逃げなくてもいい存在、あなたはもう義人だ」

と、そこまで言われた。

「でも、私の永遠の生命はあるんでしょうか？ 私もキリストの復活の生命にどう

してあずかれるんですか、復活のキリストに飛びついていいんでしょうか？ 復

活のキリストはどこにいらつしやるんですか？ マリヤがしがみつこうとしたら、

『触らない、触らない。私は天の父の御許に行かねばならない』と仰った。」

「待つてなさい。私が聖霊となつてあなたたちの中にくだつてきて宿るから。その

時、あなたと私は一つだ。あなたはもう永遠の生命だ。その時、復活の生命はあ

なたのものになつているんだよ」

と、これが来なければ。それが小池先生のこの文章にはまだ出てない。復活のことは出てきてますけれども、それはキリストにおいて起こった勝利であつて、それが私の勝利になるということ、具体的には聖霊という姿でキリストが再び私の中に来てくださる。それから、天界にいらつしやる霊なるキリストが待っていてくださる。わがうちなる御霊のキリストと、天界におられる霊なるキリストは、神の羔として父の聖座に坐し給うキリストと同質なんです。だから、もしもイエスが神の分身ならば、今度は、わがうちに宿り給う御霊のキリストは、霊なる天界におられるキリストのまた分身です。同質なるもので繋がるんです。そして絶えず、

「あなたは大丈夫だよ」

と言つて、常に天の言葉を私に語りかけてくださる。天界のものを私に注いでくださる。そういう霊なるキリスト、このお方が一人ひとりに無条件に宿るといふ、ここまで来なければ、復活だけではまだ中途半端なんです。復活して昇天して聖霊となつて火の如く降ってきた。ペンテコステのように。そして今や、我々はいつでも



「主さま、南無キリスト!」
と、十字架の下で呼び奉れば常に、
「然り、われ汝のうちに在る。復活のわれ、聖霊のわれ、汝のうちに在る」
と。先生はあの言葉が、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。わが十字架によって霊貧しくされてある汝。復活の我、聖霊の我、汝のうちに在り」

と聞こえてきた。その時に畳の上にもぶつつぶれた、平伏したと仰った。第一回の聖霊体験は阿蘇山でした。そして第二回目の自覚的聖霊体験は東京で、「幸いなるかな霊の貧しき者」というマタイ伝5章3節にぶつかって、そのように御声が響いてきた時に、もう思わず畳の上で平伏したという。だから、

「復活の我、聖霊の我、汝のうちに在り」

と降ってきてくださらなければ、もう一度。それが本当の永遠の生命であり、私における復活の事実なんです。そういうことが、この段階ではまだハッキリとは形になっていらっしやらない。

《それはキリスト復活の事実であった。十字架のキリストにおいて神の義は立ち、罪は赦された。復活のキリストにおいて更に義は人に与えられようとする。》

義は与えられる。「生命は、愛の生命は、永遠の生命はどこ?」と捜してもここには出てこない。ですから、先生はある時まで、「十字架・復活・再臨」とか、「十字架・復活・聖霊」とか、必ず「復活」をのせられた。晩年の先生は「十字架・聖霊」という。「十」を「〇」で囲む図を描かれた。「十字架と聖霊」です。復活は途中なんです。罪の贖いという十字架の義の勝利、それを復活で宣言して、聖霊を下さる。十字架の罪の贖いの義、そして聖霊という生命。これが福音の本体であって、復活はキリストにおいて起こった通過点にすぎないわけです。復活を信じたっていいですよ、復活されたと信じてもいいけれども、やっぱりその先、聖霊となつてわが内に宿り内住して一緒に生きてくださる。

「主さま!」

と呼べば、

「うむ、われ汝の内に在るなり」

と言つて答えてくださる。そういう主さまを自分の体の中にいつもいただいている。これは恵みなんですよ。

あなたご自身がどんな姿であろうとも、関わりない。あなた自身の中にどんなに肉欲だ、性欲だ、やれ何だというのが襲いかかってこようとも、十字架の前にはびくともしない。十字架というこの灯台は、どんな台風も嵐も消すことはできない。この光は十字架で輝いている。そして、その光の彼方から聖霊という生命が絶えずあなたの中に宿っている。

十字架が本ものならば、聖霊は絶対に内住し給う。これは神の必然法則なんです。神さ



まの打ち立てられた必然法則は、「十字架・聖霊」一つなんです。キリストご自身はもう十字架ぬきでいきなり聖霊を受けられた。いきなり天に昇られるに相応しいお方でした。でも、罪なる私たちはキリストの十字架で本当にキリストと同じ聖なる姿に化せられ、罪が赦されるのけられ、真白にさせていただいて、そこに聖霊が滝のごとく降って来てくださる。もつと言うなら、

「聖霊が入るために十字架があつた。聖霊の生命、復活の生命、永遠の生命、それをあなたに与えんがための十字架の御苦しみであつた」ということです。

もともと天界では初め、アダムとイブは神さまと絶えず親しく交わっていた。蛇に唆されて、神の如く賢くなろうと思つて、しくじつて、そして神さまとの間に距離ができて、神の前に立てない罪びとになつてしまった。神さまの前から逃げて行くしかなかった。それがもう一度、神さまの世界の一つに住まわせてくださる。

所を備えにキリストは天に昇り、そして下つてきて、聖霊となつて私たちの中に内住してくださる。天と地はもう通々に列なつてしまった。壁は、幕は全部取り払われて、つながっている現実を下さつたのが——神さまの一人芝居と言つていいですよ——御子キリストをつかわし、御子キリストを十字架で叩きつぶし、そして復活せしめ、天に昇せ、そして聖霊となつて降り給う。神さまの一人芝居なんです。しかし、それは深く人間と関わつて、人間を愛し、人間を導き、預言者を通し、モーセを通し、いろいろ御意を現し、最後は御子キリストを通してあれだけのことをお語りなされた。

「それでも、人間はどうにもならん。しょうがない、あなたが十字架につけ。これしか救いの道はない」
と。どうしても救いにつながっている。

「神は神たるが故に、人間を滅ぼしてよろしい」
なんて、そんな神さまではないんですよ、本当に。それは哲学者はそういう問題を論じて、藤井先生はそういうふう

「神は義である」
と仰るけれども、私の神さまはそんな方ではない。「義である」という姿と、「絶対に救う」というこの二律背反を美事に両方もかなえてくださった。成り立たないものを成り立たせてくださった、その鍵は十字架のキリスト、キリストの絶対服従の姿です。

キリストにとつて、十字架の死ほどキリストに相応しくない不合理な、不条理なものはないと、私はいつも申し上げている。義人は生きなければいけないでしょ。罪びとは罰せられなければならないでしょ。ところが、義人中の義人が罰せられて殺されて、地獄に落とされて、そして地獄で苦しんでいる者たち、その候補者たちを、全部救い上げていく、そういうのが十字架なんです。



だから、その十字架が神さまの奥義なんですよ。天界におられる霊なる神さまの奥義を——私は天に昇ったことがないから知りませんが——地界との間で関わりを持つてくださいる生きた神さま、人を愛して人と関わりを持つてくださいる神さま、その神さまの奥義は十字架に極まっている。その十字架でその愛を受ける。そして、神さまの深みへと我々を導いてくださる。ところが、その十字架の有り難さを本当にわかるには、さっきの、

「この空しき努力をいっぺんやってください」

と、私は若い人に申し上げたい。お年寄りには申し上げません、もう時間がないから(笑)。「これを信じなさい」と言います。若い方はやっぱり、おのが誇りにかけて

「よし、私はやってみるぞ。私は人を愛するといったら、絶対に愛してみせる。私は罪を犯さないといつたら、絶対に犯さない」

と。何かそういう目標を掲げてチャレンジして、それでやって潰れてくださいよ。マラソンの選手だって、本当に走りきつてぶつ倒れて、担架にかつがれて、「ああやった!」と言うようなもんですよ。この頃はそういう選手も段々減ってきましたね、終つてもケロッとしている。逞しい選手が増えてきたけれども。

本当に人生、必ず倒れるんですよ。倒れたときに倒れっぱなしでない。本当に神さまと取っ組んで倒れた人を神さまは捨てておかない。必ずそこに救いの手が、抱きがある。そういうことを私は皆さんに申し上げたいんです。

● 信仰の本質

まだこれは途中なんです。ここから先の所はまた次回に続きをさせてもらいますが、要点だけを見ていきます。次に「信仰の本質」という所で言われているのは何かと申しますと、よく人は「信仰によって救われる」とか、「私は神を信じています」とか、そういうことに対する一つの問題を出している。人間の側から信じているものではない、信ぜしめられるのが本当の信だということ。神に圧倒された人間はもはや「信するの、信しないの」と、そんなことを言っているひまがない。

「現に私の中に神さまがいるではないか。現に私は神さまに叩きのめされたではないか、ぶつ倒されたではないか。神が有るの無いのと、そんなことを言っているひまはない。それが本当だ。空気だつてそうだろう。現に吸って生かされているではないか。全身を空気が駆けめぐっているではないか。だから空気はあるのである。私は神によって生かされてある。だから、神さまはいらっしゃるのが当たり前だと思ふ。そういう信であつてほしい」

それから、「旧約の預言者」。旧約の預言者たちは神さまに圧倒された存在だった。エレミ



ヤがそうだし、アモスもそうだと行って、そういう預言者たちはどうして神に捉えられたか。254頁の真中あたり。自分を全部ぶつけた。神さまの前に己を隠さず、誤魔化さず、あるがままを神の前にさらけだした人、そういう人に神さまの方から現れてくださったということが書かれています。

《旧約の預言者》

……しかし彼らは如何にして斯く神に捉えられ得たか。……彼らは自己をごまかすことが出来なかった。自己を包みなく告白した、生活そのものを以て神にぶつかつた。しかし彼らの存在は、おのれを投げ出すことが一切であると言つ性のものであつた。それ故に彼らが一たび神の意志の力に、その権威ある言に迎つや、彼らは神の手足となり、神の口となつて、何ものをも怖れなかつた。彼らは神の意志により、その生涯を目茶々にされた。彼らは神の言に圧倒された人間であつた。》

これが出会いというものだつたと。それから、預言者をずっとあげて、アモスは義を叫び、ホセアは愛を語りました。ミカは公平、憐れみ、そういつたことを語りました。イザヤは、特に第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤというのがずっと出てくる。それから、エレミヤが258頁に出てきます。このエレミヤという預言者と藤井先生という方が非常に親近感があるようです。ちよつとエレミヤの所を読んでみましょう。258頁の真中の所。

《預言者の信仰的実存》

……人の知る如く、神エホバと最も内面的に、真に神と親しく、神を相手に、その生涯を生き抜いた預言者はエレミヤであつた。彼こそは律法の国に生れながら律法を知らぬ人間であつた。

面白いことが出ています。律法を超えてしまった。本当にハートの人であると。

……その信頼の呼吸は則ちいのりであつた。全心を以てする神との語りいがそのままいのりであつた。それ故彼のいのりには虚しさ^{むな}がなかつた。》

しかしながら、彼は神の言葉を本当に語り伝えると、民が嘲り^{あざけ}審き^{さば}、ちつとも自分の言うことを聞いてくれない。「もう結構です」といつて神さまに訴えている場面が出てきます。そういうエレミヤです。

●終末的現実

それから少し飛ばしまして、261頁位からです。エレミヤは本当に民の罪を己が罪として背負つて神の前にやつてくる。エレミヤ自身は本当に罪なき人と言つていくくらいの人なんです。神を一切とした人。しかし、彼は神に打たれ、打ち伏せられたという。民の罪を背負つて、そして打ち伏せられたのであると。261頁の終りから3行目に、

《終末的現実》



……エレミヤも祈った、「我らの背反は**大なり**、我ら汝に罪を犯したり」（14・7）。常に民族の罪を己の罪として自覚してエレミヤは神の前に立っている。

……斯く同胞の罪を罪とし、神の審判を受け、反対に同胞からの苦難に遭い、神の憂苦を憂苦としなければならぬところに、別の路を歩む人の宿命があり、課題が横たわっているのである。》

こういう所にきますと、本当にこの福音の道というのは、ここまで読みますと、

「こんな損な道があるのか。悪い奴が栄えて平然として、善人は、義人は悪い人の罪を自ら背負って、神さまの前に執り成し、打ちのめされて、何たることだ」

と、皆さんは思われるかも知れません。けれども、キリストが負ってくださいるんです。表面的には茨の道かも知れない。表面的には何か荷を負わされているかも知れない。しかし、その重荷が重ければ重いほど、それに逆比例的にキリストの荷にないの力が強いんです。キリストの荷いの力が強い。逆にいうと、

「あなたは荷えるから、荷わしてあげるよ」

という、そういうキリストの恵みの力が臨むんです。

本人の方は案外、ケロッとしているかも知れない。マザー・テレサを見てても、そうでしょう。あのか弱い女性にどうしてあんなことができるか。賀川豊彦も、物凄く働かれた人です。小池先生は晩年、非常に賀川さんを尊敬して、お話の中にしばしば賀川豊彦が出てきました。その他いろんな方々を見ましても、みんなこの世でいろんな意味の十字架を負わされた人たちです。しかし、その人たちはキリストの僕としての自覚を持っている。その人たちは決して自分を嘆いていない。「自分はこうしてこんな貧乏くじを？」とか、「自分だけがどうしてこんな不幸な目に遭うのか」なんて、一言も言わない。

「キリストの苦しみの足らざるを補う」

という、そんな気持ちなんです。そして、

「キリストが十字架を負ってくださいました。私もキリストと一緒に世の人の罪を背負います。そのことよってこの世が神さまに近づくならば、そして、神の喜び給うところであるならば、それが自分の役割であるならば、喜んでそれをさせていだけます」

という気持ちで祈っているにちがいない。そうでないと、**眩やぶき**が出てきます。眩やぶきが出てきますと、癌がお腹の中に出てきますよ。やっぱり、体の中がいつもスカーツとしていませんと、霊と精神と肉体、これはつながっておりますからね。そのすべてを十字架で洗い流され、そして聖霊という生命がきて、荷いの力となって一緒に荷い、

「あなたと一緒に歩いていくから大丈夫だよ」

という、その御声の励まし、実力がなければ、人はこの人生を渡っていけないんです。

そして、イザヤ書の53章がここに引かれている。262頁の真中あたりです。



《…苦しむとは、この路をゆく人にとって、神の愛を生きたることである。それは特権であり光栄である。神と共に歩く人生とはそれだけ神的なものである。神がこの別の路において課し給う問題とは即ちこれである。しかも問題の解決と力とは此くの如く既に与えられているのである。地上の生涯の如きはどんなに悲惨でも、否そうであればあるだけ神の深き愛の聖業に参与しているのである。ヨブ、ホセア、エレミヤの如きは、極めて著しき苦難と愛の殉教者であった。愛はこの路の究極の内容である。それはただ神と共に死につつ、神と共に生きつつあるこの路に於てのみ可能なる愛である。

このことをかの無名の預言者が驚くべき文字で書いた。余りにも鮮かな啓示である。余りにも切実な筆である。それは空莫たる想像では断じてない。それは信仰が「つらつら目にて見、耳にて聞き、手にて触れし」ところの事実の記録である。神の啓示の現実ほど現実なものはない。それは我々が普通に言つ外面的な現実の奥に或は彼方に横わる永遠の相に於ける現実である。然り、死の相に於ける生の現実である。この意味に於てイザヤ書第53章は預言書の心臓である。

「彼は侮られて人に棄てられ、悲しみの人にして病患を知れり。まことに彼は我らの病患を負い我らの悲しみを担えるなり。彼は我らの咎のために傷けられ、我らの不義のために碎かれ、みずから懲罰を受けて我らに平安を与う。

彼は苦しめらるれども自ら謙りて口を開かず、屠場に牽かるる羔の如く、毛を斬る者の前に黙す羊の如くその口を開かざりき。彼は虐待と審判とによりて取去られたり、その代の人のうち誰か彼が活ける者の地より絶たれしを思いたりしや。彼はおのが魂を傾けて死にいたらしめ、咎ある者と共に数えられたり。彼は多くの人の罪を負い咎ある者のために執り成しをなせり。》

これはキリストの預言として受けとられる。キリストご自身がこれに関わる預言として受けとり、そしてこの道を敢然と歩まれたわけです。

「彼は侮られて人に棄てられ、悲しみの人にして病患を知れり。まことに彼は我らの病患を負い我らの悲しみを担えるなり。」

と。そういう担いの姿。それから、

「彼は苦しめらるれども自ら謙りて口を開かず、屠場に牽かるる羔の如く、毛を斬る者の前に黙す羊の如くその口を開かざりき。」

つまり、言い訳をしない、弁明をしない、つぶやかない、黙ってそれに服しているという姿。これはキリストの姿であると同時に、ある意味でいろんな苦難を背負っている人の姿であると思う。



●孫の翔君の姿

私はこれにおいて自分の孫の翔君しやうの姿を思い出し出していた。いつも車椅子で、そして特に一昨日、東京へ出てくる前に、朝、出会った。……その姿にイザヤ書53章の姿を私は見たような気がした。というのは、あの子は今まで「自分は何でこんな体なの？ なんて人のように歩けないの？」とか、「なんで？」ということを一言も言ったことがない。一回、「自分も歩いてみたい」ということは言ったけれども、「何で自分はこういう体なの？」ということは一切言わない。それから、自分では何もできませんから、たえず人に頼まなければいけない。「お水がほしい。何々してほしい」と。してもらったら必ず「ありがとう」と言う。そういう姿を見えますと、言い訳をしない、愚痴をこぼさない、黙ってそれを荷なっているという、これは正にイザヤ書53章の姿ではないかと、そういうことを思わされた。あの子の命がこれからあと何年あるかはわかりません。同じ歳の子で、胸部を圧迫されてそれで天に召されていった子どもが何人もいます。あの子の場合には、あと何年この地上で命をいただいでいけるのかはわかりませんが、私はあの子の姿を見るとときに、距離は離れていても、その距離を超え時間を超えて常にあの子の霊とあの子の心といつも一つでありたいという願いを今、強く思っています。それをならしめてくださるのは御霊の主さまだろうと思っっている。あの子はまだ福音のことを知りません。知りませんが、もう無自覚の中に主イエス・キリストが宿つてくださっている。いや言い換えれば、

「あの子の中にキリストの姿を見る者は幸いなり」

と言いたいくらいです。マザー・テレサは、地上で横たわって倒れている人一人ひとりの中にキリストの姿を見られた。だから、その方々に尽くされた。

「自分は人に行っているようでありながら、実はキリストに行っているんです」

と、それがマザーの自覚なんです。

「そんなことをして何になるの？ そんな無駄なことをして」

と、人は言います。

「私はしたいからしているだけ。私はこれが私の使命だからしているだけ」

と、平然とあの方は答えていらつしやるんですね。

だから、私はそういう——何もあの子にかぎりません——その他いろいろな障害を負った人、子供たちは、

「なぜ、誰の罪で、何が原因で？」

なんてことはわかりません。わかりませんが、何かそういう、人知れず、地上に生まれてきてそういう重荷を負っている子供たち、そういう人たちの中にこそ、キリストは宿り給う。一緒にいてくださるのではないだろうかと思う。

というのは、救いというのは神さまの一方的な業です。その人が善であるから救うとか、悪であるから救わないとか、そうではない。神さまは「己が救わんと思う者を救い、審か



んと思う者を審き給う」お方でしょ。神さまの独占活動なんですわ、ルターが言いましたように。神さまは全ての人を救おうとしてキリストを遣わし、十字架につけ、そしてそれを受けとる者を救うのをよしとし給うた。

「十字架の言は、滅びる者には愚かであるけれども、救いにあずかる我らには神の力なり。神の愚かさは人よりも賢い。神の智慧は深い、この十字架という愚かなるものを信ずる人を救うのをよしとし給うた」

と、コリント前書1章の所で言ってますように。

子供たちは無自覚でしょ。けれども、その子供たちの中にこそキリストは入りこんで、「あなたの罪、そんなものは全部私が背負って片づけた。あなたは義人だよ。私はあなたの中に宿りたいんだよ。あなたと一緒にいるよ。あなたはこの地上での命はたとえ短くても、この世を去る時は、本当に自由なんだよ」

と。下の子の衡平こうへいは割合にまだ体が動くけれども、ついこないだから「歩きたい、歩きたい」と言い出す。上の子は16歳になります。衡平は今年で10歳になります。「歩きたい」とおぼあちゃんに、つまり私の妻に言うんです。それに何と答えているかというのと、

「天国へ行ったら歩けるよ。地上では歩けないけれども、天国へ行けば歩けるよ」と言つて、聞かせているみたいです。だから、そういう子供たち、私共にとつては、聖書が語っている世界、キリストが我々に語つてくださっている世界は、遊びごとではないんです。これほどのリアリティ(現実)はない。それをそういう子供たちを通して、私たちに語りかけてくださっている。よく人は、

「なんで、奥田先生のような神さまに仕えている人のところのお孫さんに、そういう不自由な姿で神さまはお産みになったのだろうか？」

と言われる。

「そんなことは、私は知らん。そんなことは知りません」

と私は言う。しかしながら、そういう事態を通して非常に向こうの世界というか、キリストの世界の深さ、有り難さ、重厚さというものが私の中に真実のものになったことだけは事実です。それも信じていましたよ、けれども、それが本当に体の中にしみ込んだ。そして、あの子たちの中に暗さはありません。あの子たちの面倒みてくれている両親に暗さはありません。私はあの子供たちの面倒みてくれている両親にいつも合掌の気持ちです。

「よくぞ、神さまがお遣わしくくださったこういう子供たちの面倒を、あなた方がみてくれて、ありがとう」

と、そういう思いで今、見えます。子供たちに対しては、

「自分は何もしてやれなくてごめんね。でも、本当に祈っているよ、いつも一緒にいるよ。天国ではいつも一つだよ」

と、そんな気持ちで子供たちに対してしています。私は忙しいから、家内の方がしょっちゅう



孫の所へ行って面倒を1日2時間はみるようにしている。ヘルパーさんとかボランティアの人は1日2時間は来てくれるけれども、それだけではどうしても足りない。あとは親が全部の面倒をみるとなると、とてもやりきれない。親も肉体的につらい。それで、家内が1日2時間は子供の相手をしに行つてやつてくれている。私はそれができませんから、家内に対しては、「ありがとう」という気持ちです。

だから、そういう子供たちを支え見ていくということを通して、何かそこに神の国が現実に築かれているという思いがする。人から見たら最も辛そうな場が、実は神の祝福の場になっているというのが私の実感なんです。ちようど、イエスさまが生まれた時にマリヤさんが赤ちゃんを抱いて、そこに羊飼いがおり、ヨセフがおり、みんなが覗きこんでいるという聖家族の場面がありますね。そういう場面があの二人の子供たちと、それからミヤビというワンちゃん(介護犬)、それから両親、そこへボランティアの人が行つたり、私たちが行つたりしてます。そこにいつも何かキリストの霊的空間、愛の空間、光が射し込んでくるような、そんな思いで私は見えています。

先生の本を読むのはこれだけにしておきますが、また今日の足らざる所は次回まわしにいたしますが、皆さんどうぞ、絶対にキリストの愛の力、キリストの御霊の愛の力の凄さ、底力、これは決して言葉で説かれているような、そういう思われたる世界ではない。これこそリアリティである。これがリアリティでなかつたら、何だと。この世に目に見えてくるものはみな移ろいゆくものなんです。古びゆくものでも、どんなに新しいものでも、それがネオスであつてもカイノスではない。けれども、キリストの御霊が私たちと一緒にいてくだされば、キリストにあるところのものは常に永続するもので、永遠なるもので、過ぎ行かない。常に輝いてやまない、そういうカイノスの生命です。それを現してくれているものに触れていくということが人の生きがいではないでしょうか、喜びではないでしょうか。そういう永遠なるものを至る所に見ていく人の目は幸いなんです。花において、鳥において、キリストは永遠なるものを見ておられた。だから、

「**栄華を極めたソロモンもこの花の美しさにはかなわない**」

というふうには、滅びゆくものの中に滅びゆかない本当の永遠の美を見て、それをキリストはキャッチしておられたのではないだろうか。

● 夫婦円満の秘訣

ですから、どうぞ、本当に聖霊によつて新しい目をいただいた者は、生命をいただいた者は、人が見えないものを見させていただく。人を見るのに、人の善いところを見ていく。欠点を見ない。人の善いところを見ていく。

私は昨日、言つたんですよ、「夫婦円満の秘訣は何ですか?」と。自分を見る時には自分のマイナスを見なさい。相手に対して自分がどんなひどいことを言つたか。どんなに自分



が至らない人間であったか。そのマイナスを全部思い出しなさい。相手を見る時は、どんなに自分に善いことをしてくれただけを見なさいと。向こうを見るのにはプラスを見て、自分を見るのにはマイナスを見る。そしたら相手を裁けますかという。もしも相手がいなくなったら、自分はどうなっているだろうか、そう思いなさいよと。

東京の生活で私は3年半たって、妻の有り難さがよくわかったといつも言いますね。何も日干しになるといっているのではなくて、もつと精神的な意味におきましても。そういうふうに見れば、本当にそこにはさっきの永遠的なものがそこに動いてまいります。だから、人間、謙虚にすべて、そういうことでやっぱり、神さまの愛の角度、それが自分の中に内住して、その愛の目で人を見る。そういう時に、本当にキリストの霊の王国が築かれていくのではないのでしょうか、人と人との間に。

「神の国はあつちにある、こつちにあるというものではない。実にあなた方のただ中にある」

とキリストは言われました。それはそういうふうには、愛の御霊が一人ひとりの中に宿り、人を見るのに愛の目をもって人を見、自分を見るにはきびしく、しかしその厳しさはキリストの十字架でゆるさされているという有り難さとなって現れ、そして、人を見るには愛をもって見る、感謝をもって見る。

「こんな自分と一緒にの生活をする決めてくれてありがとうございます」という思い。本当にそうだと思うんですよ、

「よく今まで一緒にすごかったです。ありがとうございます。これからよろしく」という、そんな思いですよ。だから、もし死に別れる時に、

「一緒に生きてきて幸せだった」

と、そう言ってくれたら最高だと思うんですよ。自分も相手にそう言う。相手も自分もそう言ってくれたら、これは最高でしょうね。その最後の言葉が聞きたいですね。しかし、それは最後にならんとわからん(笑)。これは最後までわからない。最後のところで、

「あなたと一緒に幸せだった」

と言ってくれたら、これは最高だと勝手に思っている。

本当にそうじゃありませんか。人と人との関係は一期一会ごえですよ。「会うは別れの始め」といいます。そういう一期一会の出会いというものは、永遠のカイノスとして、永遠なるものとしていつまでも生かしてくるもの、これはやっぱりキリストさまです、主さまですよ。主さまは、主はわが命なんです。そういう中に我々は包みこまれているんです。

先生の文章は、なにせ33歳の時の、今から65年前で、先生の聖霊以前の段階で、先生の思索の結晶ですから、まだまだ厳しい面が非常に表に出てきている。「担い・抱き」という面がまだ薄いと思う。先生自身が格闘しておられる時だから。先生が聖霊のバプテスマを受けて、本当に愛の包みの中にいだかれた時に、「いいよ、いいよ」というふうに変貌して



行かれます。でも、若き日の先生はこういう所を必死になって辿って行かれたという、これも事実です。

そういうことで、今日は終わりたいと思います。

● 祈り

それでは短く祈って終りにしましょう。

主イエス・キリストさま、新年初めてこうして、僕を新宿集会にお導きくださり、我々の敬愛します小池辰雄先生の若き日の魂の格闘の旅路においてものされた、このご講演、「別の路」あるいは「天路」、これを読みつつ、あなたの恵みに導かれて参りましたことを感謝いたします。

主さま、私たちはあなたの絶対無条件のご恩寵のこの福音、あなたが生命を本当に賭けて、十字架に生命をおかけくださって、私たちに罪の赦し、義の道を与えてくださり、ご復活と昇天そして聖霊の降臨となって、今、身親しく「主よ」と呼び奉る我々のうちに内住し、また御霊自らい難き呻きをもって執り成してくださいこの執り成しの祈りをもって、いつも天界にいらつしやるキリストさまと、そして御霊の内住のキリストさまと、一如一体としてくださる恵みを感謝いたします。

小つぽけな存在である我々を永遠なる無限無量なる、ひるいなき尊き存在としてくださった主さま。一人ひとりあなたの御霊のご内住のゆえに無限の尊厳を持っております。一人ひとりが尊き器であります。そのことを深く自覚し、争いある世に本当の争いなき道がこの十字架・聖霊の道であることを、私たちが生活体験の中から告白していくことができますように希い奉ります。

新宿集会を祝福してくださって、ありがとうございます。本当にここにおいてあなたにお会いすることができまことをありがとうございます。老いも若きも、新しき者もまた年配の年限を経てきた者も、みな常にあなたのこのカインスの新たな新しさ、永遠の新しさ、永遠の生命の中にいただきとついでいただいております。どうぞ、小さき者たち、病に臥せっておられる兄弟姉妹たちを顧みてくださいますように。また、天界に先に往かれた先生、また兄弟姉妹たちをどうぞ覚え、そして天地一如となってこの福音の道を共に歩んで行くことができますように。また、日本という国をどうぞ顧み、救い上げてくださいますように。世界を正しき道へと導いてくださるように。キリスト者が祈りを一つにしていくことができますように、希いたてまつります。

この尽くしませぬ感謝と讃美と祈りを兄弟姉妹の祈りと共に今、主の御名にあつて御前にお捧げいたします。アーメン。

